

演劇創造

復刊

第153号

(第60巻 第2号)

令和8年(2026年)



— 発行 全国高等学校演劇協議会 —

〒732-0068 広島県広島市東区牛田新町1丁目1-1 広島市立広島商業高等学校 TEL 082-228-2481 FAX 082-222-0869

事務局長 黒瀬 貴之

ホームページ <http://koenkyo.org/> メール info@koenkyo.main.jp

第71回全国高等学校演劇大会(香川大会) 審査の経緯

第71回全国高等学校演劇大会は、四国の北東部に位置し瀬戸内海を望む美しい港町・高松市のサンポートホール高松を会場に、7月26日(土)から28日(月)の日程で開催されました。

今大会の専門審査員は、日本の演劇界を代表する評論家、演出家、美術家、教育関係者の皆様にご担当いただきました。演劇評論家として長年にわたり評論・講演・著述活動が続けられ、全国大会でも常連の審査員である西堂行人先生、劇団青年座で数多くの作品を手がけ、演出家として幅広く活躍されている須藤黄英先生、舞台美術家として多彩な舞台を手がける長田佳代子先生、桜美林大学教授として教育と演劇の双方の立場から深く関わる能祖将夫先生の4名です。また、顧問審査員としては、中部日本ブロックから高橋利明先生、近畿ブロックから藪博晶先生、九州ブロックから中原久典先生の3名にお願いしました。いずれの先生も全国大会出場経験をお持ちで、地域の演劇活動にも深く関わっておられます。

審査は大会初日の上演終了後から毎日、事前審査会を実施。各校の上演後の短い休憩時間にも審査員室では活発な意見交換が行われました。最終日の審査会では、まず優秀賞以上に選ばれる4校を決定するための投票を実施し、審査員一人ひとりが印象に残った4校に丸を付けて集計しました。結果、神戸常盤女子高等学校(兵庫)と長野県松本美須ヶ丘高等学校(長野)がそれぞれ6票、北海道網走南ヶ丘高等学校(北海道)と青森県立青森中央高等学校(青森)が5票ずつを獲得し、非常に拮抗した結果となりました。これを受けて、最優秀賞を決定するための決選投票が行われました。

議論では、「どの作品がこの大会を代表するにふさわしいか」という観点から、構成力・テーマ性・演技の完成度・演劇的挑戦性など多面的に意見が交わされました。特に、長野県松本美須ヶ丘高等学校『愛を語らない』では、脚本に巧妙に仕組まれた構成上の“仕掛け”が高く評価されました。登場人物が実在と思わせながら実は架空であるという設定の妙、圧倒的な演技力と作品完成度、そしてタイトルの秀逸さが審査員一同に強い印象を残しました。一方、兵庫県神戸常盤女子高等学校『キャベツはどうした?』は、個性的なキャラクターが織りなす日常的な会話劇を軸に、演技・構成・演出の完成度が極めて高いと評価されました。自然で生き生きとした演技と確かな演出力によってリアルかつ魅力的に仕上げられ、2作品のいずれを最優秀にするか審査員も大いに悩む結果となりました。最終的な議論と決選投票の結果、作品全体の構成力と象徴性の高さが評価され、最優秀賞・文部科学大臣賞には長野県松本美須ヶ丘高等学校『愛を語らない』が選ばれました。優秀賞には、兵庫県神戸常盤女子高等学校『キャベツはどうした?』、創意に満ちた演出と全世代に人生を肯定的に見つめさせる北海道網走南ヶ丘高等学校『はしれ、たくしい!』、そして戦争を鬼と人間の対立からあぶり出した青森県立青森中央高等学校『あの子と空を見上げる』の3校が選出されました。

また、奄美大島の返還という今までなかなか語られなかった歴史を描き、演劇の意味と力を感じさせた鹿児島県立伊集院高等学校・上田美和作『朝は明けたり』が創作脚本賞を受賞。高校演劇の指針となる学校に授与される内木文英賞には、生徒創作で独特の語り口と演出が評価された北海道苫小牧東高等学校が選ばれました。さらに、演出賞には完成度・構成美・空間演出が際立った千葉県立松戸高等学校、舞台美術賞には空間の使い方とアイデアが秀逸であった北海道網走南ヶ丘高等学校が選ばれました。最優秀校には副賞として東京演劇大学連盟賞が授与され、後日、大学から講師が派遣されてのワークショップが予定されています。

本大会は、香川の海風と夏の光に包まれながら、全国から集まった高校生たちの情熱と創造力が交差する熱気あふれる3日間となりました。忘れてはならない歴史や社会問題、家族や友情の関係、人間の一生など、現代社会を生きる人間の“今”を舞台上で真摯に描く作品が多く、観客に強い余韻を残しました。どの高校もハイレベルなスタッフワークを見せ、完成度も高く、すべての作品に演劇の力と可能性が感じられました。

次回大会は秋田県で開催されます。高校生たちの挑戦と創造の舞台が、さらに豊かに広がっていくことを心から期待しています。

【最優秀賞（文部科学大臣賞・東京演劇大学連盟賞）】

長野県松本美須ヶ丘高等学校 郷原 玲／創作

『愛を語らない』

【優秀賞（文化庁長官賞）】（上演順）

神戸常盤女子高等学校 (有)山や百貨店／創作

『キャベツはどうした？』

北海道網走南ヶ丘高等学校

網走南ヶ丘高校演劇部・新井繁／創作

『はしれ、たくい！』

青森県立青森中央高等学校 畑澤聖悟／創作

『あの子と空を見上げる』

【優良賞】（上演順）

市川学園市川高等学校 中嶋陸人・山田一彰／創作

『ばれ★ぎやる』

鹿児島県立伊集院高等学校 上田美和／創作

『朝は明けたり』

高田高等学校 西尾 優創作

『第76回中部日本高等学校演劇大会文部科学大臣賞受賞作品』

千葉県立松戸高等学校 阿部 順／創作

『わたし』

北海道苫小牧東高等学校 晴山 能／創作

『やっぱり、こっちがいい』

徳島県立城東高等学校 よしだあきひろ／創作

『ポーチとピロティ、ストックヤード』

島根県立松江工業高等学校 亀尾佳宏／創作

『お手紙かみかみ』

香川県立善通寺第一高等学校

白川美妃・猪井敏也／創作

『A Happy Christmas』

【創作脚本賞】

上田 美和 『朝は明けたり』

【内木文英賞】 北海道苫小牧東高等学校

【演出賞】 千葉県立松戸高等学校

【舞台美術賞】 北海道網走南ヶ丘高等学校

第71回 全国高等学校演劇大会 審査集計表

日付	番号	ブロック	学 校 名	演 目 名	西堂	須藤	長田	能祖	高橋	敷	中原	計	賞
7月31日 (水)	1	関 東	市川学園市川高等学校	ばれ★ぎやる		○						1	優 良
	2	九 州	鹿児島県立伊集院高等学校	朝は明けたり							○	1	優 良
	3	中部日本	高 田 高 等 学 校	第76回中部日本高等学校演劇大会 文部科学大臣賞受賞作品								0	優 良
	4	近 畿	神戸常盤女子高等学校	キャベツはどうした？	○	○	○	○		○	○	6	優 秀
	5	関 東	千葉県立松戸高等学校	わたし	○		○				○	3	優 良
8月1日 (木)	6	北 海 道	北海道網走南ヶ丘高等学校	はしれ、たくい！		○	○		○	○		4	優 秀
	7	北 海 道	北海道苫小牧東高等学校	やっぱり、こっちがいい								0	優 良
	8	四 国	徳島県立城東高等学校	ポーチとピロティ、ストックヤード				○				1	優 良
	9	東 北	青森県立青森中央高等学校	あの子と空を見上げる	○	○			○	○		4	優 秀
	10	中 国	島根県立松江工業高等学校	お手紙かみかみ				○	○			2	優 良
8月2日 (金)	11	香 川 県	香川県立善通寺第一高等学校	A Happy Christmas								0	優 良
	12	関 東	長野県松本美須ヶ丘高等学校	愛を語らない	○		○	○	○	○	○	6	最 優 秀



市川学園市川高等学校



鹿児島県立伊集院高等学校



高田高等学校



神戸常盤女子高等学校



千葉県立松戸高等学校



北海道網走南ヶ丘高等学校



北海道苫小牧東高等学校



徳島県立城東高等学校



青森県立青森中央高等学校



島根県立松江工業高等学校



香川県立善通寺第一高等学校



長野県松本美須ヶ丘高等学校

感謝を込めて

平井 幸子

第71回全国高等学校演劇大会（香川大会）、第71回全国高等学校演劇指導者講習会、第49回全国高等学校総合文化祭演劇部門は令和7年7月26日（土）から28日（月）の日程で高松市のサンポートホール高松にて開催されました。当日は、多くの方に会場までお越しいただき、盛況のうちに全日程を終えることができました。これも多くの方のお力添えがあったからに他なりません。この場をかりて感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

部門代表委員として本大会の準備を進めていくことが決まったのは2022年だったと記憶しています。その間、学校業務の合間に少しずつ少しずつ準備を進めていきましたが、学校業務と総文祭を秤にかけるとやはり学校業務が勝り、正直に告白すると総文祭の準備は二の次にして進めていた自分がいました。開催年度に入り堰を切ったように大量の業務が押し寄せました。開催日が近づくにつれ膨らむ不安を抱えながら、多岐にわたる業務をこなしていました。そんな私を支えたのは、「全ての出場校の上演が成功するよう開催県として準備を進める」という思いでした。演劇部門では上演をはじめ、講習会や生徒講評委員会等いろいろなことが並行して行われます。全ての行事が成功することもちろん大切ですが、演劇部門で何よりも大切にすべきは上演の成功です。開催県はそのために準備を進めているのだ、ということのある時ふっと思い出しました。そして準備を進める意味を再認識し、少し気持ちが楽になったのを覚えています。

そして、忘れてはならないのは生徒たちです。岐阜県、鹿児島県、東京都と直近の3都県と比較すると香川県の生徒数は圧倒的に少なく、そのことも不安に駆られる要因のひとつでした。ほとんどの生徒が全国大会を知らない状況で臨んだ大会運営でしたが、生徒たちは本当によく頑張ってくれました。そして、運営は数の力ではないのだということを実感する大会でした。「自分が高校生の時に香川に全国大会が来るなんて奇跡です」ある生徒に言われた言葉です。この経験が今後の彼らに少しでも活かされることを願っています。

（第49回全国高等学校総合文化祭（かがわ総文祭2025）演劇部門代表委員）



「情熱と目標を胸に」

谷 花 心

まずは、かがわ総文祭2025を無事終えることができてほっとしています。部門別委員委員長になってから全力で駆け抜けた一年半は長いようであつという間で、私の人生において特別な時間でした。

お恥ずかしい話ですが、私は高校に入るまで総文祭というものがあることを知りませんでした。高校生になって総文祭の存在を知り、そんな大きな大会が香川で開催されるのかと驚きました。その頃の私は、自分自身がこんなにも深く関わることができるとは思っていませんでした。演劇部に入った後、部門別委員を任せられ委嘱状を渡された時は、この大会に携われるという嬉しさと同時に責任を感じました。2024年の夏には運営について学ぶために、ぎふ総文の視察に行きました。私はそこで初めて全国大会の場に足を踏み入れたのですが、あまりの人の多さに衝撃を受けました。来年は香川がこうなるのだと思うと、ワクワクも不安も感じたのを覚えています。また、ぎふ総文の実行委員の生徒さんたちに会場や運営の説明を受けたり、生徒さんたちの運営の様子を見たりして感じたことがあります。それは、実行委員の人たちの運営に対する熱が凄まじかったということです。各業務で大会を成功に導くために懸命に働く姿は、私の目標になりました。

それから、本大会をよりよいものにするため、私たちなりに準備を進めていきました。そして、プレ大会や抽選会を経て、ついに本大会を迎えました。大会期間中の私の主な仕事は大会の様子を記録写真に収めることだったので、周りの様子に気を配っていました。ロビーや感想ボードの付近に行ってみるとみなさんが上演や大会について楽しそうに話していたので、自分たちの働きが報われた気がしました。

心が折れそうになったこともありましたが、仲間や先生方、かがわ総文祭2025に関わる全てのみなさまのおかげで、素晴らしい大会にすることができました。感謝申し上げます。

来年度開催される「あきた総文2026」の成功を心よりお祈りいたします。

(生徒演劇部門委員会委員長 香川県立高松工芸高等学校3年)

「最高の経験を最高の仲間たちと」

渡 邊 凜 音

私は前年度に開催された岐阜総文で初めて生徒講評委員を務めさせていただき、今大会で2回目の生徒講評委員をさせていただきました。

2023年に行われた鹿児島総文に私は先輩方に連れていってもらい、初めて生徒講評を聞きました。同じ高校生が私たちの劇について真剣な目で討論している姿にその時は単純に感心していました。

そして今年度に入り、私は顧問の先生からのお誘いを受け、かがわ総文で生徒講評委員長を務めることになりました。正直不安でした。私なんかに生徒講評委員長が務まるのか、と。しかし実際にアドバイザーの先生や他の生徒講評委員たちと会い、話していくうちにだんだんと緊張もほぐれ、またほかの生徒講評委員も代表としてこの全国という舞台で討論することに不安を抱いていたり、緊張していたりと皆同じなんだと思うことができ、安心しました。

事前研修や交流会も終わり、ついに大会が始まりました。大会3日間は本当にあつという間に過ぎていきました。上演を見ては皆で討論をし、夜には各上映の担当委員が講評文を書く、これを繰り返します。アドバイザーの先生が討論のアドバイスをくださるのですが1日目の全ての討論終了後に言われたことは「内容が浅い」でした。作品の内容をなぞるだけになっていて、自分が作品を見てどう思い、これからどうしていこうと思ったのかという一番討論されて欲しい部分が、私たちの討論には含まれていませんでした。その結果、私は講評文を書く際に、自分の感情を書くことができず文末に困ったり、同じような言い回しになったりしていました。2日目、そのことを皆で共有し、自分が受け取った素直な感情を討論の際に発言するよう心がけました。上演後すぐに気持ちを言語化するのは難しいことですが、それをできるようになることが一番大切だと気づきました。

共に笑い、泣いて、成長できる、最高の仲間に出会えたこと。またそんな最高の仲間たちと最高の演劇を見て討論をする最高の経験ができたこと私は誇りに思います。

(生徒講評委員長 香川県立観音寺第一高等学校)

高校演劇の熱い夏

西 堂 行 人



高校演劇の夏の闘いは、「危険な暑さ」を忘れさせるほど熱かった。会場となったサンポートホール高松は、高校生の熱い舞台を見守る観客の熱気で満たされた。全国から勝ち抜いてきた強豪校が勢揃いした今回の大会は、近來にない激戦が予想された。だが、新鋭の登場がいい意味で予想を裏切った。多くの観客たちも新鮮な体験を味わったのではないか。高校生の演劇にまだこんな手があったのか、と。

— 1 —

今回もっとも驚かされたのは、ラストに登場した長野県松本美須ヶ丘高の『愛を語らない』（郷原玲＝作）だった。架空の文豪・柴山鉄山と娘・亜伊の葛藤は、現代の女子高生にも響くものがあったろう。鉄山の人間的な「最低」ぶりは、人間として許しがたいが、亜伊は受け容れる。すべてを語り尽くすことをモットーとする作家としての父の信条は、いちばん大切なことは書かないという倫理に貫かれており、語られない「愛」の本質に気づいたからだ。（アイは亜伊と掛けられている）とにかく言葉の文学的水準が高く、舞台を取り囲むコロシアムにト書きや人物の心情を語らせる物語展開も巧みだ。観客は作者の仕掛ける罫と謎解きに引き込まれる。プロに引けを取らない見事な現代演劇だ。この達成度は、今後の高校演劇のレベルを一段引き上げてくれるだろう。対照的に、神戸常盤女子高の『キャベツはどうした？』（（有）山ヤ商店＝作）は、等身大の女子高生の日常を鮮やかに切り取った。個性豊かな三人の演技は達者で、就職や進学などに悩む彼女らの実態は説得力があった。とくに「アタリマエを疑え」を彼女らが発見したあたりから急激な展開を見せ、キャベツを思わせる女性が登場した場面は圧巻だった。それまでの空気が一変し、物語が一気に動き出しドラマが膨らみ、いつまでも観ていたいと思わせるほどだった。彼女らもまた何かを掴み、一段成長した喜びが伝わってきた。それは充実した部活に裏打ちされた飛躍だったのだろう。演劇が豊かに生成していく現場に立ち会った喜びは、演劇評論家としても大きな収穫だった。

常連校の強豪二校はいずれも「転校生」をモチーフにしていた。青森中央高の『あの子と空を見上げ

る』（畑澤聖悟＝作）と千葉・松戸高の『わたし』（阿部順＝作）である。転校生はすでに秩序が出来上がった生徒たちの中に送り込まれた「他者」である。赤鬼の集団の中に入学した人間モモカは、仲間外れになるが、次第に溶け込む。やがて人間の転校生の数が増え、ついに数が逆転してしまう。まるで数の多寡が勢力の優劣を競う現代世界の情勢を見ているようだ。青森中央ならではの糸乱れぬ集団の演技、レベルの高さは群を抜いている。一方、松戸高の作品は、転校生がゴリラだったことから引き起こされる悲喜劇だ。その背景には、自然破壊の問題がある。ゴリラの転校生は、住む場所がなくなって他国へ移住を余儀なくされた難民の象徴である。いずれも「他者」の側から現在の人間社会を見返すことによって、これまで自明とされてきた常識が覆される点で共通している。桃太郎は鬼の側からすれば侵略者であり、動物園は動物からすれば、自由を奪う檻にすぎない。視点を变えるだけで、新たな解釈が生まれる。こうした主題を舞台上で表現していく高校生には、多くの気づきがあるだろう。と同時に、高校演劇の枠を超えて現代の問題に直面させた問題作だった。

— 2 —

高校演劇の魅力は、高校生の「今」が投影されていることだ。市川高の『ばれ★ギャル』（中嶋陸人・山田一彰＝作）は、ギャルがバレーボールをやったという発想がまず意表を突く。彼女らは真剣に部活に打ち込むが、学校からも母からも正當に評価されない。そこに生じる悩みが滲み出てくる。作者の一人である中嶋陸人は三役を演じるなど、大車輪の活躍だった。

三重・高田高の『第76回中部日本高等学校演劇大会 文部科学省受賞作品』（西尾優＝作）は、彼らが体験した思いから出発した。それは大会直後の能登地震の災禍だ。行方不明になった同級生のことを誰が覚えているのか。彼らの無念の思い、こだわりの率直に投げ出されている。北海道・苫小牧東高の『やっぱり、こっちがいい』（晴山能＝作）は今回唯一の生徒創作だった。地方の高校生の実態を背伸びせず、自由に表現する姿は澁刺とした若さがあり、ほのぼのとした気持ちになった。一つのシーンを90度変換して反復して見せる演出は卓越した発想だ。「バックナンバー」の曲が彼らの思いを代弁しているのも興味深かった。香川県・善通寺第一高の『A Happy Christmas』（白川美妃、猪井敏也＝作）は、演技の質が揃わない点が残念だったが、素朴な体当

たり演技には好感を持てた。

問題作だったのは、徳島・城東高の『ボーチとピロティ、ストックヤード』（よしだあきひろ＝作）だ。二年連続で最優秀に選ばれた同校は、当然注目された。物語は高校の文化祭の進行するさなか、その背後で何か不穏なことが起こっているらしいという不可解で不安な空気感で展開する。だがその原因は最後まで明確に語られることがない。観客の想像力に委ねるという趣向だろうが、言葉が求心力を持ち得なかった。

— 3 —

演劇には知られざる事実を知らしめる機能がある。鹿児島・伊集院高の『朝は明けたり』（上田美和＝作）は、まさにそんな作品だった。奄美大島の本土返還をドキュメンタリー風に扱った舞台は、高校演劇では異色作だ。地元の問題は地元が報道しなければという地元局の思いが、生徒の演技を通してひしひしと伝わってきた。とくに三味線を自力で実際に演奏するシーンの気魄には心を打たれた。

網走南カ丘高の『はしれ、たくしい!』（新井繁ほか＝作）はタクシー運転手になった拓志の物語だ。客との応対は心温まるエピソードばかりで、見えてくる社会の諸相は現実味がある。しかし最後に彼は自問する。本当に自分のやりたかったことは何だったのか、と。平凡でも小さな幸せを噛みしめつつ、ほんのわずかな後悔を伴う。感慨深い回想は感銘を与えるが、高校生として、この帰着点に違和感をおぼえた。二人の男女が車の部品を表現するなど、アイデアに富み、演出の妙に魅力を感じた。

松江工高の『お手紙かみかみ』（亀尾佳宏＝作）は、冒頭、口上役が観客と丁々発止のやりとりを交わす。この即興的な演技と当為即妙な芝居に高校演劇の枠を逸脱したレベルを感じた。まどみちおの「やぎさんゆうびん」をめぐっての果てしない対話は、その解釈に機知が富み、言葉の面白さに才気を感じた。高校演劇にも遊びが登場する時代になったことを痛感した。

高校演劇はあくまで教育の一環である。その枠の中でどこまで演劇の本質に迫れるか。審査の基準はそこにある。高校生の「今」を映し出すことは魅力がある一方で、高校生の日常を超え、現代の「今」を映し出そうとする意欲作にも心惹かれる。最優秀、優秀作に選ばれた作品は、いずれも虚構度の高い作品だ。高校生の「今」は部活や教室の外側に存在する社会や現実、つまり他者に出会う時、彼らの次なる演劇が始まるのではないだろうか。

（演劇評論家）

最高の夏休み

須藤 黄英



各学校の前情報を入れず事前に台本も読まずに、観たものに対して講評しています。字数の関係もあり乱文ご容赦ください。結果発表後は賞に選ばれなかったとガッカリした人もいますが、約1900校の中の12校!です。あの大舞台でやり遂げたことに誇りを持ってください。私もたくさんの刺激と演劇愛と新世代パワーをいっぱい感じることでできた3日間でした。ありがとうございました。

表後は賞に選ばれなかったとガッカリした人もいますが、約1900校の中の12校!です。あの大舞台でやり遂げたことに誇りを持ってください。私もたくさんの刺激と演劇愛と新世代パワーをいっぱい感じることでできた3日間でした。ありがとうございました。

市川学園市川高等学校「ばれ★ぎやる」

現役高校生の長所と強みが最大限生かされた作品。各キャラクターの個性、言葉のチョイス、笑いの作り方が秀逸でセンス抜群。ストーリー展開や、母と相手強豪校の生徒を同じ俳優で男性が演じるという仕掛けもよく考えられていた。去り際や体の使い方、メイクのこだわりなど、細かいところまで笑えるように作りこまれていた。聞こえにくい台詞があったり、照明のピンスポがずれてしまう、美術（トラス）の使い方がもったいないなど、スタッフワークの惜しいところの精度があがると無敵。エンタメ最高!と思わせてくれた作品でした。

鹿児島県立伊集院高等学校「朝は明けたり」

演者にも観客にも簡単ではない題材にチャレンジしてきたその姿勢と意義をまず評価したい。熱量でおしたくなるどころも演技が抑制されていてかつ丁寧。言葉と風土は密接していて人間の根っこであるという大切なことを改めて思い出させてくれた。一枚だけの写真も効果的。衣裳の色バランスが見事で全体の美しさに寄与していた。美術の飾りを含め歌や踊り、転換など要素が多いので少し省いて一つ一つの精度をあげるとよい。物語の強さを信じてよいのではないかな。

高田高等学校「第76回中部日本高等学校演劇大会 文部科学大臣賞受賞作品」

脚立の側面についた白い花が受賞と追悼の両方の意味が兼ねられているようで印象に残った。裏向きの芝居が多いのにセリフがちゃんと聞こえてきて基礎力の高さを感じた。歌も上手で発声が出ているのだと思う。タイトルの意味が分かりにくいこと、ストーリーがなかなか展開しないのがもったいなかった。泣ける題材こそデリケートに、心理の繊細さ、丁寧さを大切に、事実のシビアな描写があると奥行きが出たように思います。被災地へ思いをはせる気持ちはいっしょに伝わりました。ありがとう。

神戸常盤女子高等学校「キャベツはどうした？」

進路の悩みというありきたりの題材がとんでもなく面白いシチュエーションコメディになっていたことにただ脱帽。過度な演出をせず、各キャラクターと俳優の個性を生かした全員の勝利。オーソドックスな物語だけど、各人物の心理や伏線、小池の意外な裏切りなど、細部が丁寧に描かれている。机の配置で自然に関係性と心理の変化を見せたこと、ドアの使い方、照明、衣裳もバランスよく、悪魔合体暗転も心底ワクワクした。リアルやナチュラルな部分と演劇的に遊ぶバランスが最高。素直な演技と誠実な姿勢をこれからも大切に。

千葉県立松戸高等学校「わたし」

ゴリラと内向的な女の子が友だちになり、それが周りの生徒をも感化してゆくという奇想天外な物語から、動物飼育や環境問題、戦争にまで発展していくスケールの大きさに驚いた。枠であり檻であるセットのバリエーションの豊富さ、転換のスムーズさ、身体性を生かした動きに、衣裳チェンジしてダンスまで踊る俳優陣の熱演と支えたスタッフワークに拍手。うまくまとまるだけではなく、勇気をもって枠からはみでるパワーがついたら最強！

北海道網走南ヶ丘高等学校「はしれ、たくしい！」

拓志はもちろん、タクシーが次々形をかえていくさま、分身2人の絶妙な距離感とチャームングさ、それぞれ乗客の人生に心奪われた。シルエットの生かし方や、時間の飛ばし方、大人数での細やかな転換、マイムと小道具のバランスも素晴らしかった。年齢があがっても自然な演技に好感もてたし、様々な世代の人に見てほしいと思える最高の人生賛歌でした。全国に来るまですべてのパートでブラッシュアップを重ねてきた結果だと想像します。

北海道苫小牧東高等学校「やっぱり、こっちがいい」

何も無いところから観客と一緒に劇世界を作っていく導入が良かった。現役高校生のリアルで軽妙な会話とノリが生かされていたが、マスターの介入の仕方や、時間をとめる人の存在、聞こえる会話と聞こえない会話など、ルールの在り方が都合にみえてしまう部分があった。またたとえば、芸能人の不祥事について【記者会見しない】という、今の社会現象の特徴が反映されると作品に広がり生まれたと思う。晴山くんの次作が楽しみ。卒業しても続けてくれたら嬉しいです。

徳島県立城東高等学校「ポーチとピロティ、ストックヤード」

舞台セットの迫力と仕掛け、ストックヤードで世界を区切るという着眼点が面白かった。あれだけのスピード感で60分を駆け抜けるというのは相当な稽古をしてきたからこそ可能になったと思う。ただ、見

切れが多かったり、説明が少なく、間をとらない大きな声の連続は、観客を置いていく一因だったように思う。やりたいことがしっかりあって、見せ方のスタイルを追求した結果だと思いますが、意欲作、挑戦作こそ慎重に。

青森県立青森中央高等学校「あの子と空を見上げる」

美術、音響、衣裳、照明、すべてのテクニカルを最小限で表現してるのに、実に分かりやすくその意図までも伝わる作品。鬼と人間、かわいさと残酷さ、個と集団、友情と争いなど二極化の見せ方も見事だし、集団創作の難しさではなく、集団ならではの利点が生かされていた。また感情の波に陥ることなく、出来事に対して距離感の取り方が絶妙で、観客が感情移入しながらも冷静に悲惨な現状を考えることができる芝居になっていた。部内競合が大変そうですが、切磋琢磨して磨きあってください。

島根県立松江工業高等学校「お手紙かみかみ」

前説で完全に観客を味方につけることに成功していた。誰でも知ってる歌を題材に、堂々巡りの責任論が展開し、政治の世界や戦争責任において曖昧な答弁を繰り返すことへの揶揄や批判が分かりやすく、かつ面白く提示されていた。話が脱線していく滑稽さとともに、議論が深まったり、演劇としての発展性が感じられるとなお良かった。自分の延長上にある役や物語ではない作品で見てみたいと思うほどの魅力ある俳優陣でした。1年生、素敵な先輩たちを引き継いで、ぜひ続けてね。

香川県立善通寺第一高等学校「A Happy Christmas」

劇中劇の構造が巧みで、良い意味でなんども罠にかけられた。また、劇と日常でのセットと小道具の使い方が工夫されていたが、広い客席に届けるパワーと、細かいところへの配慮がほしい。たとえば、衣裳や小道具に季節感、効果音の音量、全員が揃ったときの立ち位置、会話のテンポやメリハリなどを具体的に修正していくと全然完成度が変わります。他校から得た全国のレベルを刺激に、みんなで創意工夫してみてください。これからの飛躍に期待しています。

長野県松本美須ヶ丘高等学校「愛を語らない」

黒で設えた八百屋舞台、白黒衣裳、音響、選曲、照明、舞台転換、小道具の使い方などテクニカル面で総合芸術としての完成度が高く、作品として洗練され、統一感がある。一人一人の俳優の基礎もしっかりしていた。鉄山を帽子だけにして想像力に委ねたのも秀逸。ラストシーンの裏切りもあっぱれで、少し停滞しかけた物語に原稿用紙をばらまくあの弾け方は爆発力があつた。個人的には、「上演にあたって」の文章は完全に騙さずに別のもっていき方があるのではないかと思います。

(劇団青年座 演出家)

『きらめく水面。輝く舞台』

長田 佳代子



<7月26日(土)>

1 市川学園市川高等学校(千葉県)『ばれ★ぎゃる』

幕が上がると、ショッキングピンクのユニホームが目に飛び込んできて、一瞬でギャル界に引き込まれた。

美術としては、上手下手にピンクの衣装に呼応するように縁取られたイントレ2台と、中割りを挟んでの高台というシンプルな構成だが、イントレの高低差と中割りの開閉で生まれる奥行き感を利用して、お芝居にリズムカルなテンポを与えていた。

しかしながら、イントレは空間にスパイス的な働きかけはしていたが、高低差のみの使い方にとどまっていた、少し勿体無かったように思う。

また、主人公がウィッグをとって黒髪のありのままの自分を受け入れる重要なシーンで、スタンバイの都合上、中割りが閉められていたことで、黒髪が際立たないなど、演出上の改良の余地がある。

とはいえ全体として、シルエットやストロボ効果なども使い、親離れ・子離れのオーソドックスなテーマをギャル文化を取り入れつつ、軽快な作品に創作されたところは、高く評価できる。

中島みゆきの名前が出た後で、“空と海との間に”の編曲が流れたのが、とてもキュート。

2 鹿児島県立伊集院高等学校『朝は明けたり』

戦時下の実話を元にしながら、そこから離れて演劇として立体化する際の壁の高さは計り知れず、これまであまり焦点を当てられなかった奄美群島の本土復帰について、部員が一丸となって取り組み、全国大会の場で上演されたことは、とても意味のあることだと思う。

“舞台美術で使う要素は2つまで”と言う美術家がいるくらい、美術要素を絞る事は、作品の感度を上げることに繋がっていくと考えられる。

大島紬、紗幕絵、色彩の異なる入り組んだ台組、空を分断する柵、星条旗。もちろん、どれも意味のあるものだが、袖幕の黒がそれらの関係性を断っていたように思う。

要素を絞って構成を変えることで、見せるべきシーン、伝えるべき言葉が際立ってくるのではないかな。

今回でいえば、占領下を象徴する柵がなくなり、青空から続く海の上に小さく浮かぶ奄美(平台組)がシルエットで表現されるラストシーンの演出を、どのように美術がアシストしていくか悩むところ。

そう考えると、柵が飛んでいく距離や速さはあれで良いのか?袖と台組との距離感は大丈夫か?さらに、その前で島みんなが踊る絵の見せ方はあれで良いのか?など、まだレベルアップを図れる箇所がある。

恐らく、アナウンサーの二人と泊を中心とする島の人々のどちらを軸として何を伝えるのかを再考し、切り捨てるものは捨て、生かすものは最大限に生かすための話し合いをもう少し設けるだけで、作品の力強さは格段にあがるだろうと思う。

3 高田高等学校(三重県)『第76回中部日本高等学校演劇大会 文部科学大臣賞受賞作品』

上手、下手の机の山がブルーシートをかけることで、一瞬にして、被災地の記憶に繋がる。

能登半島地震の直後に、その衝撃とやり場の無い思いが、創作の原点にあると伺い、能登だけではなく、30年目を迎えた阪神・淡路大震災なども蘇る。

予期せぬ形で大切な人を失った悲しみは、どんなに時間が経っても癒えないもので、それでも前を向いて歩こうというメッセージには痛みを伴う。そんな事を考えながら、この作品を多くの人に観てもらうにはどうしたら良いかを考えると、やはり舞台上にあるもの全てに心血を注ぎ、丁寧に扱う事が第一ではないかと考える。ミザンスはもちろん、台詞の音量や美術でいえば、例えばブルーシートの特性を知ること、シルエットで何をイメージさせようとしたのかを熟考する事など…。

言葉や物を丁寧に扱い、稽古を積み重ねることで、ようやく溢れ出る世界観。そのような創作を目指すのは、非常に難しい事だが、その可能性を秘めた作品であった。

4 神戸常盤女子高等学校『キャベツはどうした?』

開演直後、相手役の反応をもう少し受け入れる余地があっても良い!などのメモを取っていたが、後半になるにつけ、メモをとる事を忘れて見入った作品だった。

高校演劇ではよくある教室という設定ですが、席を斜めに配したことで、目を見て話すことをしなかった生徒同士が、徐々に身体の向きが変わり、相手の話を聞こうとする姿勢へと成長してゆく姿を、空間が上手に支えていた。

就職組の少数派に登場人物を絞り、隔離された教室で、先生、謎の緑の女性、母親などの外的要素から影響を受け、三者三様に成長していく姿が巧みな構成で描かれていた。

現代の教育現場で振り回されながらも、なんとか自分の道を切り開こうとする等身大の高校生の姿を、面白可笑しく描くだけでなく、最後には教育、子育ての問題へと繋がり、非常に考えさせられる作品へと昇華し、改めて演劇の可能性を感じる舞台であった。

引き戸がピタッと閉まるのも気持ちいい!窓の半透明の透け感の抜群の効果!

5 千葉県立松戸高等学校『わたし』

まず目を引く、美しい配色の檻とボックスが、芝居に軽やかさを与えている。シーンによって位置や重ね方を変えたり、時に檻がダンスしたりもする演出が素晴らしい。

また、前明かりの使い方や、後半の波音の出し方など、スタッフワークは目を見張るものがある。

森のシーンでは、大量の新聞紙で表現したのも面白い。

“わたし”が動くときカサカサとなる音も効果的で、視覚的な印象の強かった前半の檻の美術から一転し、感覚に訴える美術になっていた。

新聞紙は、現在ではほとんどが古紙を使用してい

るので、一昔前のパルプの使用＝森林破壊には繋がらないが、この題材の中で感覚と言葉に直接的に訴える素材のチョイスは秀逸だった。

森林破壊＝人間破壊の問題と捉えると、スケールが大きく感じてしまうのですが、ゴリラと女子高生が合体したことで、その距離感を軽やかに飛び越えた気がする。

遠い国の話のように思える世界を、私たちの心の問題に置き換えることができたのは、戯曲の巧妙さというよりは、創っている皆さんが演劇はどんな事でも表現できると信じているからだと感じ、改めて演劇の可能性を教えられた作品だった。

＜7月27日(日)＞

6 北海道網走南ヶ丘高等学校『はしれ、たくしい!』

タクシーを3分割で見せるアイデアもさることながら、タクシー ABが擬人化されたことで、これまでに見た車演劇の中でダントツにその表現力を拡大していたと思う。

手のひらのウインカー、ドアの開閉、ワイパーの動き、細やかな演出ですが、最強のエンタメになっていた。

タクシー ABの存在は、拓志の相棒でもあるし、分身とも捉えられ、彼の人柄を3人で豊かに、コミカルに描き出していた。さらに、タクシーがベンチ(しかも公園では背もたれ付き)にも、食卓にも、デートシーンでは遊園地のゴンドラにも変身し、どこまでも美術を使い倒して、大道具冥利に尽きると思う。

奥舞台に低めに平台を横一列に敷いたところが個人的には高評価。ローホリ隠しだけでは、綺麗にホリゾン特前の芝居を立たせることが出来ないという気づきは、拓志が仕事でいない間も家庭を支える妻の姿や、子供の成長を短時間で美しく印象的に描き、その姿が、後半の拓志の人生に大きく影響を与える演出が素晴らしい。

ドアを叩く音や、音楽のIN・OUTもとても繊細な操作をしていた。

音は、美術や照明などの視覚的な情報以上に、距離感や心理描写に大きな影響を与えるので、マイクの使い方やスピーカーの位置など、音響スタッフの仕事は本当に重要だと思う。

7 北海道苫小牧東高等学校『やっぱり、こっちがいい』

テーブル2つとキャッシャーの置かれたカウンター1つというシンプルな構成だが、“開店”＝“回転”と同時に、それらが飾り変えられ、裏表の関係になる、非常に楽しい構成になっていた。

中割りを閉めていたのでティーザを下げた効果が分かりづらく、何を狙っていたのかやや疑問に感じたが、劇場空間を最大限に活かそうとする工夫は、お店のドアとお手洗いのドアを間口一杯に設定した所など随所に感じた。

このドアの距離感が、カランコロンという音で繋がる淡い恋心にも繋がり、とても心地よかったので、もっと分かりやすく横長の空間構成で強調させても良かったように個人的には思う。

また、回転するために複数のマスターが登場し、

時には黒子も出てくるなど、回転させるためのルールをもう少し詰める必要もあったと考える。

戯曲に関しては、“開店と回転”の言葉遊びから、“コープのティッシュ”まで、日常の生活の中から、貪欲にネタを拾い集めているところは賞賛に値し、これらの小さな起爆剤が、高校生の恋話に独特のエモーションを与えている。

一部の審査員から、高校生に戻ってあんな恋がしたいという欲望を引き出してしまったことが、この作品の虜にさせた最大の成果ではないだろうか。

8 徳島県立城東高等学校『ポーチとピロティ、ストックヤード』

レンガのブリック、ヒビ割れなどの表現したコンクリートのパネル、形成された残骸、垂れ下がる布、ビニール素材の黒いゴミ袋、切り取られた窓とその向こうに見える真緑の造花の植栽、劇場の床とは一線を描く黒く不気味な敷物など、多様な素材を一つのフォルムに入れ込むのは至難の技で、目を見張るものがあった。

役者が叩くと揺れる、薄っぺらのパネルも、皮膚のようにも捉えられ、内と外とが薄い皮一枚で隔てられている関係性が痛々しく感じられた。

“ストックヤード”などの単語の場所性からイメージを触発し、人の命が資源として扱われた、フォロコーストの銀歯や髪の毛の山まで想像を掻き乱すような世界観は、すぐに共感を得るというものではなく、今、演劇を続ける意味を問い直す作品になっていたと考える。そういった意味で非常に挑戦的で意欲的な作品だった。

終わらない戦争、演劇の無力感、描くものがなくなった世界への嘆き、ぶつけようのない言葉の数々と、心休まる場所のない高校生たちの姿が、相乗効果をもたらすように演出されているのだろうなとは感じたが、要所で、届けなければならない台詞やその反応が、ミザンスやパネルの見切れなどで埋もれてしまっていたのは非常に残念で、そのあたりの微調整を丁寧に行うことが重要なのではと感じた。

9 青森県立青森中央高等学校『あの子と空を見上げる』

“鬼の赤”と“人間の白”が、チェス盤の上のように勢力分布が変化していく様が、効果的に演出されており、美術としては素舞台というのかもしれないが、視覚的にも非常に楽しく観劇できた。

個人的には動画を収めているアイテムが、携帯電話ではなくビデオカメラであるところが寓話性を担保したように感じた。

寓話の中にあって、ドローンの攻撃などはビビッドに現実社会とリンクしており、その辺りが違和感なく一つの世界に織り込まれていることが、作品に豊かさを与えていた。

赤、白、そして全部真っ黒こげ…声にならない恐怖と悲しみを、すがるような気持ちでカメラを向けた青空。その先に何があるのかなと考えた時に、もはやその先には誰もいないのではと思わせるような、ラストシーンの作り込みは非常に繊細で、折り重なった死骸の中に1本だけ伸びた腕が、作り話ならどんなに良いかと思いたくなるような現実の戦場と劇場空間を結びつけた。

10 島根県立松江工業高等学校『お手紙かみかみ』

前説の緩さでまず、心を奪われた。その甲斐あってか、観客参加型の作品は博打みたいなのところがあるが、見事に観客の心を掴んでいたと思う。

話がループしながら、気づくと軌道から離れていたり、時折、時事ネタが入っていたりして別役作品を彷彿とさせる空気感も素晴らしかった。

美術においては、鏡餅のように積み重ねられた、白と黒の構造物が3つというシンプルな空間構成だが、衣装と相まって作品にインパクトを与えていて、一人で立っていても、大人数で座っていても、なぜか絵になる構成で、それでいて見切れがないという恐ろしく優秀な装置だった。

ただ、山羊さん問題からバンザイまで（出兵の風景と解釈）が、可笑しさでは繋がってはいいたが、批判性や問いかけにまで飛躍する手前で幕が降りてしまった気がして、その先への欲求を抱かざるを得なかった。他の参加校の作品をチャームングにいじるなど、大会2日目ラストの会場を大いに沸かせてくれた。

＜7月28日（月）＞

11 香川県立善通寺第一高等学校『A Happy Christmas』

幕が上がった瞬間、大掛かりな美術にまず驚かされた。

よくある学校の教室の設定だが、芝居が進むにつれ、それぞれの学生のバックグラウンドが垣間見える部屋や公園に変化し、劇中劇とも共鳴しており、一つのセットの中に様々な世界が盛り込まれた複雑な構造であることが見えてきて、面白かった。

美術以上に戯曲も非常に難解で、冷たさと温かさの両方を兼ね備えた、とても不思議な世界観だった。

複雑に次元が変化するため、照明、音響のスイッチチェンジや登退場のタイミングを整理し、

きちんと合わせることで、場面の切り替えにメリハリがつき、よりエッジの効いた作品になると感じた。

上手のドアが衝立の役割を果たし、声だけの芝居を成立させている部分もとても魅力的で、あえてシンメトリーにし、下手にも同じような開口部を設けることで、多重構造の戯曲にも多用できたのではと考える。また、裏を回らなければ登場できない構造により、少し間延びしていた箇所もあり、そういった部分の解消も考える余地があるように思う。

クリスマスのイルミネーションも凝っていて、細部にわたり努力が垣間見えるので、芝居とのきっかけ合わせが今後の課題だと考える。

12 長野県松本美須ヶ丘高等学校『愛を語らない』

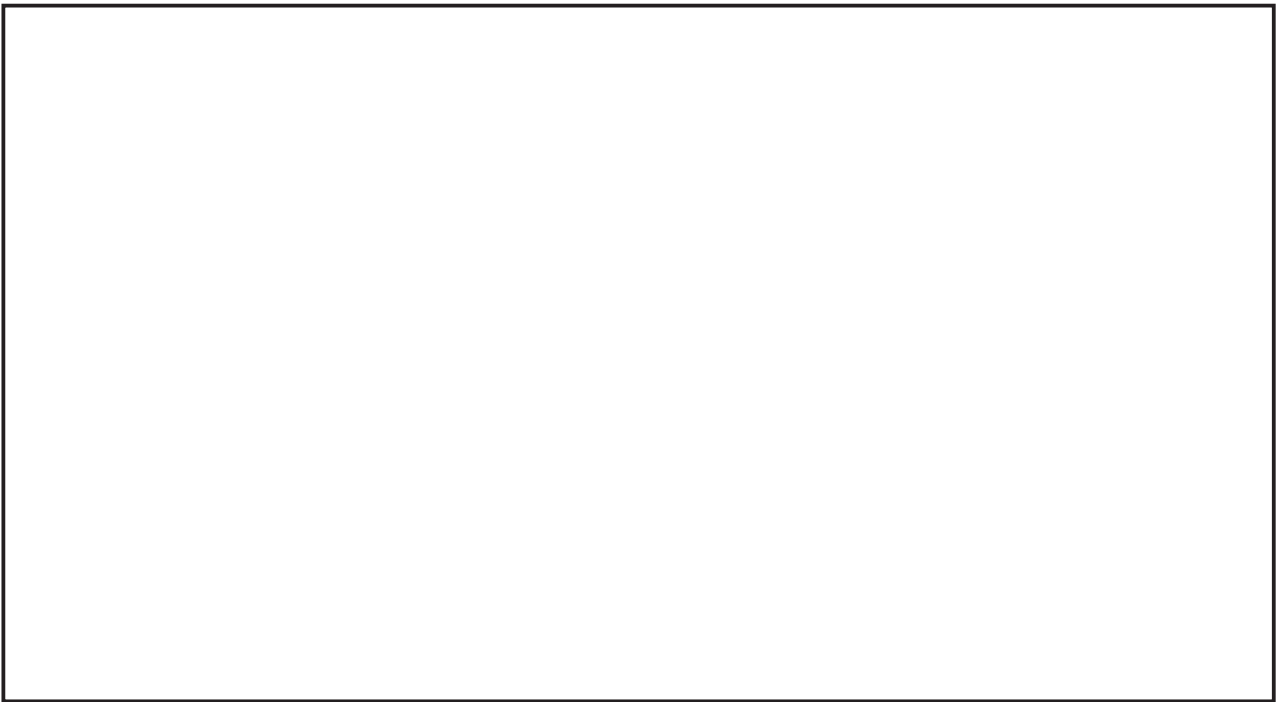
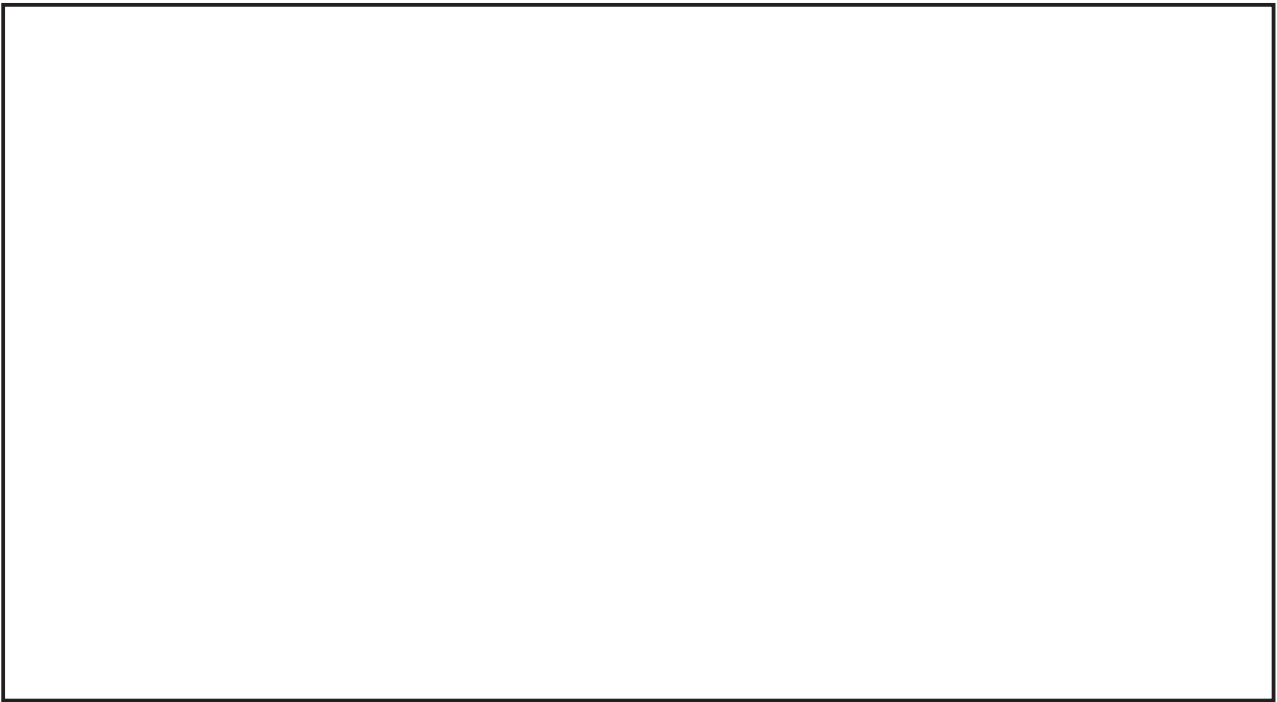
まず、空間構成においては、3分割された急勾配の開帳場と、モノトーンでまとめられた椅子というシンプルな構成だが、全てにおいて計算されており、開帳場越しの奥舞台の使い方も見事だった。

椅子は、時に机や列車の座席などに変化し、移行行く各場の情景を観客に美しくイメージさせることが出来、考え抜かれた演出であった。

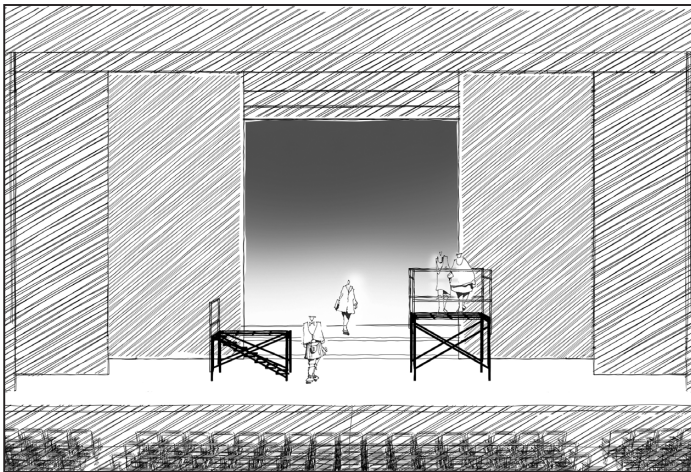
紅一点の紅色の衣装とモノクロトーンの群衆の衣装がとても鮮やかで、2回目の観劇だが、その美しさは記憶に鮮明に残っていた。

全てのキャスト、スタッフが出せるだけの力を全て注ぎ込んでおり、滲み出る表現力、作品への向ける愛情、他者とのコミュニケーション、圧倒的な強さと柔軟性には、日々の丁寧な訓練の積み重ねを感じざるを得ない。終始、笑いながら楽しく観劇し、無防備に一人の女性の生き様に感情移入し、日本語の美しさや奥深さを満喫していたが、終幕で「I LOVE YOU」を叫ばれた瞬間、前回以上に込み上げてくるものがあり、この作品はただ愛を語ることの大切さを突きつけているのだという事に気付かされた時、改めてこの作品の豊かさに感服した。

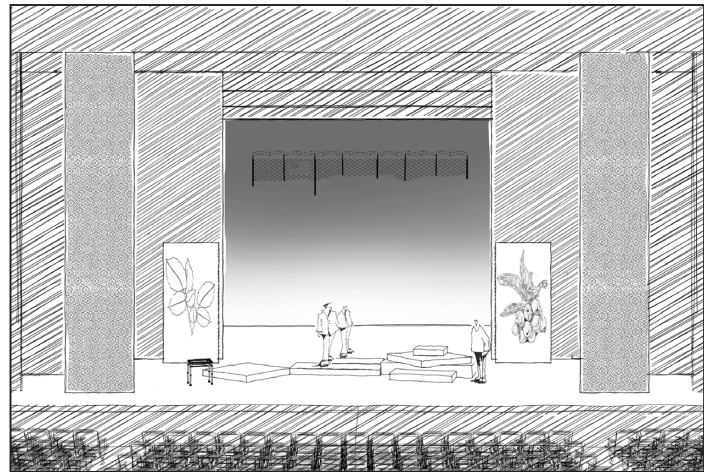
（舞台美術家）



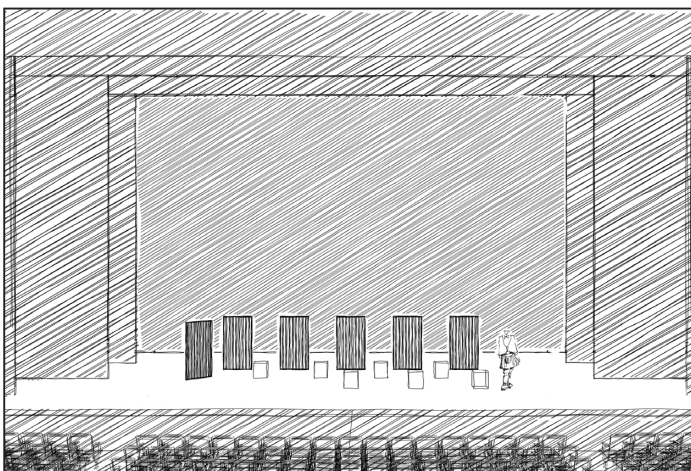
第71回香川大会



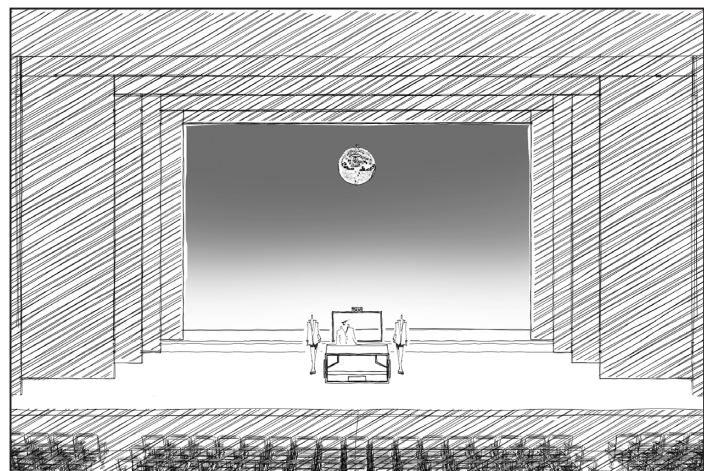
市川学園市川高等学校
「ばれ★ぎやる」



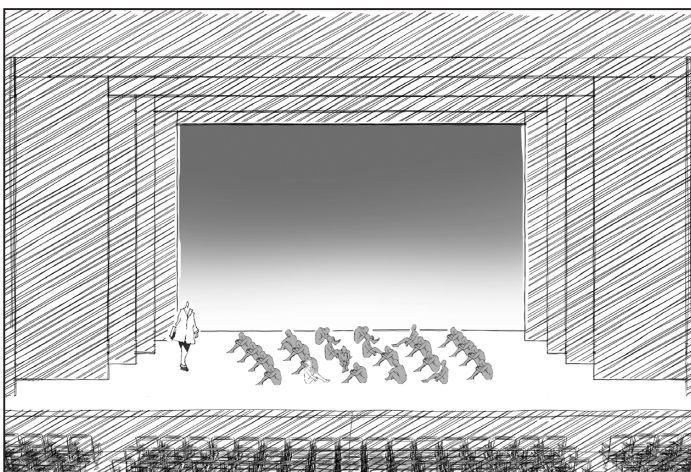
鹿児島県立伊集院高等学校
「朝は明けたり」



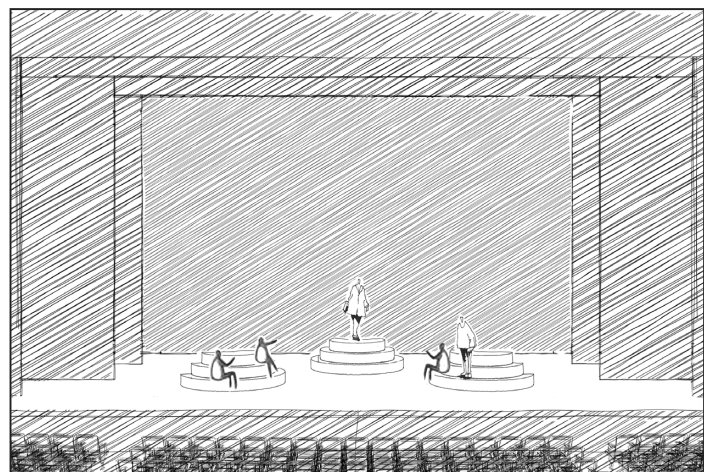
千葉県立松戸高等学校
「わたし」



北海道網走南ヶ丘高等学校
「はしれ、たくしい！」

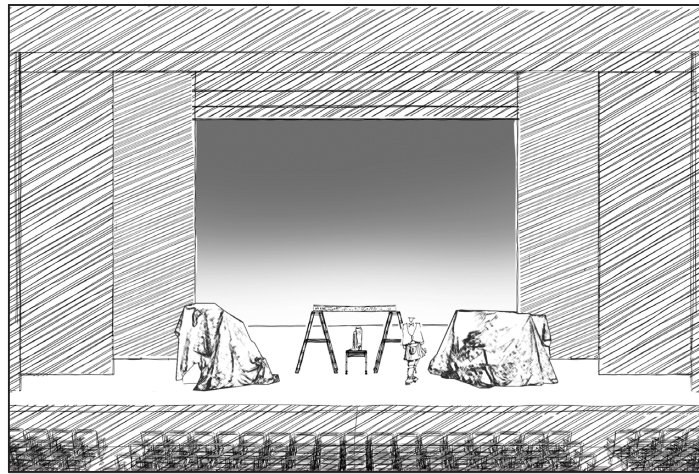


青森県立青森中央高等学校
「あの子と空を見上げる」



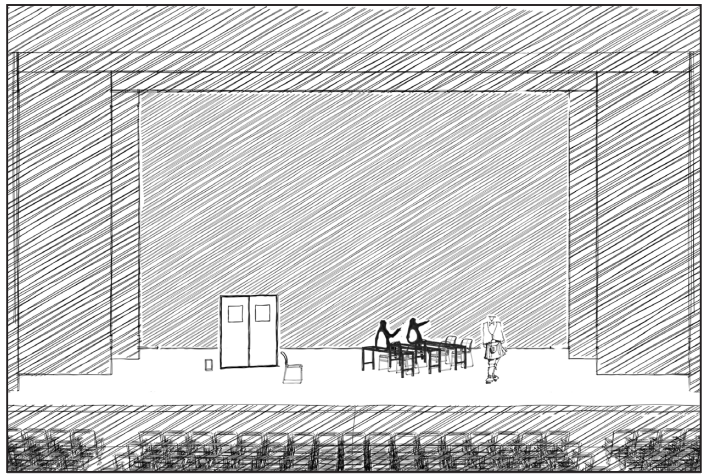
島根県立松江工業高等学校
「お手紙かみかみ」

舞台図



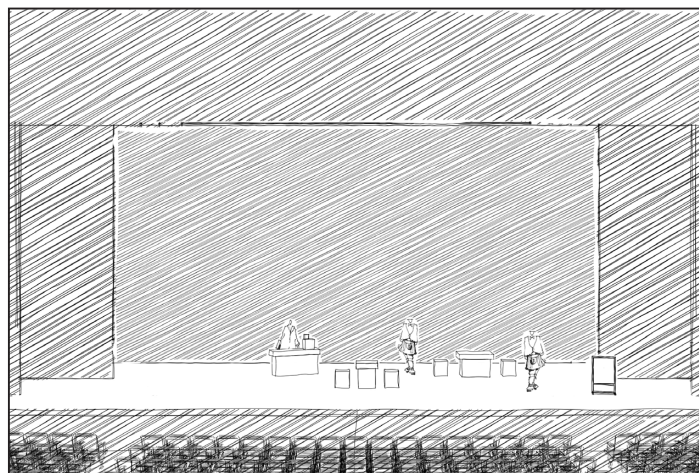
高田高等学校

「第76回中部日本高等学校演劇大会 文部科学大臣賞受賞作品」



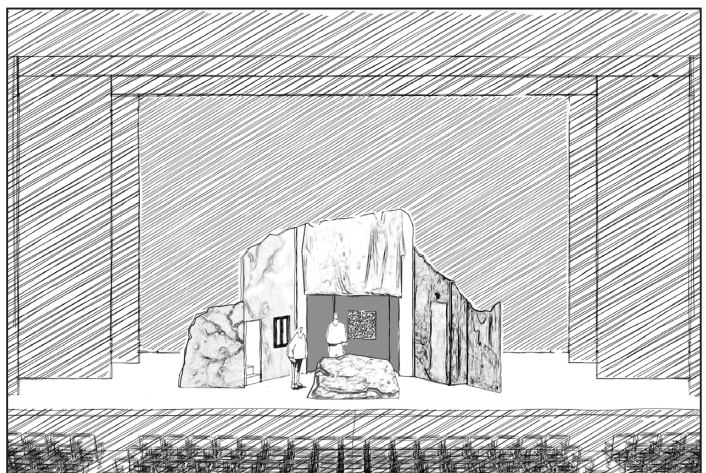
神戸常盤女子高等学校

「キャベツはどうした？」



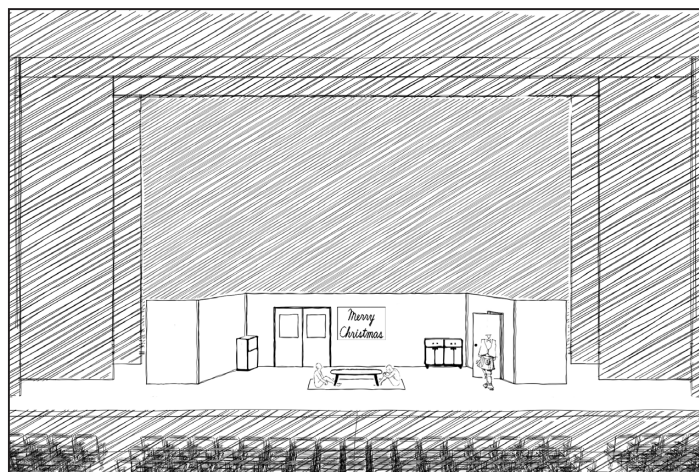
北海道苫小牧東高等学校

「やっぱり、こっちがいい」



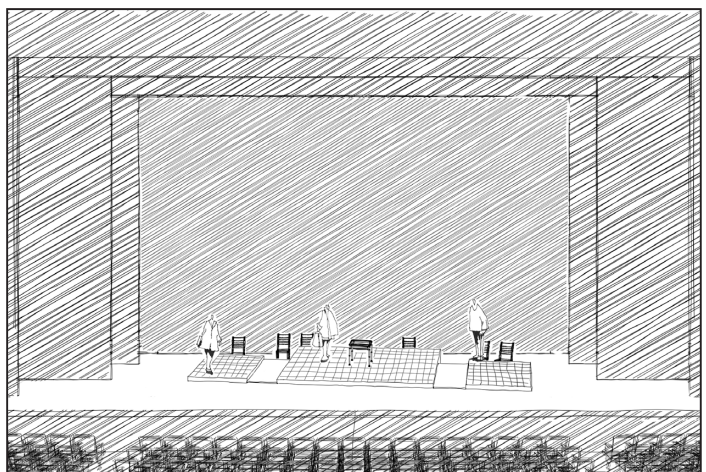
徳島県立城東高等学校

「ポーチとピロティ、ストックヤード」



香川県立善通寺第一高等学校

「A Happy Christmas」



長野県松本美須ヶ丘高等学校

「愛を語らない」

地下水脈または因果交流電灯の発見

能 祖 将 夫



優れた演劇作品から他の作品との繋がりを発見することは大きな喜びだ。言わば演劇作品の厚い層の中を縦横無尽に伸びる地下水脈、あるいは宮沢賢治の言葉

で言えば「因果交流電灯」の青い照明の明滅。今回の講評にあたり、私はその発見を期待しながら観劇した。密かに、高校演劇を高校演劇から開放してみたいという気持ちもあっただろう。そして、その期待は見事に叶えられた。「高校演劇」独自の魅力は充分にありながらも、広く演劇作品としての豊かさに満ちていたように思う。では、各作品を見ていこう。

■「ばれ★ぎゃる」市川学園市川高等学校

全体を通して連想したのは「歌舞伎」である。それは先ずギャル独特のメイクや髪型・髪色と俳優の動きの様式化によるものだ。だが話が進むにつれて、それだけではなく、タイムスリップが唐突として入ってくる「荒唐無稽さ」や、めくるめくぶっ飛び感、観客を徹底的に楽しませようとするエンタメ精神、はたまた女形?的存在にも歌舞伎に通ずる「傾く感覚」があった。作品は迷わない強さと迷う弱さを対立させて進んで行く。同時に母と娘の愛情と拮抗。それらが乱気流のように渦巻きながら進むところに青春の風を感じた。

■「朝は明けたり」鹿児島県立伊集院高等学校

奄美の本土復帰に関する史実を徹底的に調べ上げ、取材者(民放放送局員)と被取材者(島民)を同じ俳優が演じるという仕掛けを用いながらも基本的にはストレートな形で提示していた。その骨太で真っ直ぐな姿勢には、その姿勢でなければ出せない清々しさがあった。その上で、俯瞰の(批評的な)視点があっても良かったかもしれない。例えばアメリカの支配下から本土復帰を果たしたその本土には日米地位協定があるという現実をどう捉えるのか、そんな視点が少しあるだけで、作品が今に向かって開いてくるのではないだろうか。

■「第76回中部日本高等学校演劇大会 文部科学大臣賞受賞作品」高田高等学校

この作品は私にとって大切な二つの文芸作品を想起させた。一つは中原中也の「盲目の秋」。「風が立ち/浪が騒ぎ/無限の前に腕を振る」で始まる第一連。青春の最中にかけがえないものを失った喪失感。もう一つはメーテルリンクの『青い鳥』の「思い出の国」。親しい死者は思い出せばいつでも会えるけれども、いつまでもそこに留まっていはいけない、というメッセージ。この舞台の主人公はとても大切な友情をある日突然失うことで思い出の国に引き籠もる。彼女は再び時を動かすことが出来るのか。切なくも魅力的な原石を持ちながら、それが表現として磨き切れていないことが惜しまれた。「切実さ」は剃刀の刃のように研ぎ澄まされていてほしい。

■「キャベツはどうした?」神戸常盤女子高等学校

多くの者が進学する環境にあって、就職組の二人

の女子が履歴書を書いているところからこの作品は始まる。設定も演技も高校生の等身大であり、やがて加わったもう一人の女子と共に進路と友情と親子(母娘)関係について交わされる会話は基本的にボソボソ系でトボけた味があり、観客は第四の壁越しに彼女たちの様子を見守りながら応援しているような感覚になる。観客との親密性がこの作品の魅力なのだ。社会の奔流に出る前のよどみに浮かぶうたかたのような時間の温もり。

■「わたし」千葉県松戸高等学校

女子高校生はゴリラなど演じたくないに違いない。が、演じている内にきっと楽しくなってきたのではないか、まずはそんなことを感じさせた作品だった。とある動物園のゴリラが眠ると、その夢の中の姿が女子高生となって現実の教室に現れるというシュールな設定。全体的に低めの体温の演技で物語が綴られていき、最後はアフリカの自然破壊という環境問題に辿り着く。一筋縄ではいかない構造や流れの不可思議さが私には魅力的だったが、もしかしたら観客を選ぶ作品かも知れない。

■「はしれ、たくしい!」北海道網走南が丘高等学校

タクシーの中で生まれた主人公の半生を描いたドラマ。ほのぼのとして暖かいタッチの人生賛歌。その人生とは、若い頃の夢は叶わなかったが、それでも家族や乗客のささやかな幸せを願いながら日々を懸命に生きるというもの。タクシーは擬人化されて二人の俳優が演じているのだが、そのアナログ感が作品の内容と相まって好ましい。ドラマの伏線の回収もそつが無く、ウェルメイドプレイ。が、これから未知の人生に出ていこうとする高校生の目がどこにあるのか、気にならなくもなかった。

■「やっぱり、こっちがいい」北海道苫小牧東高等学校

本番舞台の向こうに稽古の様子が二重写しのように透けて見えてくる瞬間があるが、この作品にはそんな魅力があった。この作品は生徒だけで創り上げたと聞いたが、延々と恋バナをしている内容に、生徒同士がああでもないこうでもないと言い合いながら作っている様子が重なって見えてきたのだ。それは演劇への恋心をどう観客に伝えるかを巡るのもあったに違いない。全編に流れる良い加減のガラガラ感を通して、青春とは無駄話のことだと表明した映画「セウツミ」の愛おしさを思い出したりもしていた。

■「ボーチとピロティ、ストックヤード」徳島県立城東高等学校

演劇は時代を映す鏡だというのが、そういう意味では最も今を映している作品だった。私達が生きているのは混沌の時代だからだ。作品の構造はシンプルで『ナルニア国物語』のように、扉一枚向こうに異世界が広がっているというもの。だが問題はそこがゴミ置き場で、ゴミ(無価値のもの、不要不急のもの)が捨てられているわけだが、なんと演劇も棄てられているらしい。同時にそこはガザを思わせる天井の無い牢獄でもあって、命もゴミ扱いされている様子だ。二重三重のメタファは魅力的なのだが、観客が戸惑いの中に放置されていくように思えた。生徒講評委員会では「よく分からなかったけど圧倒さ

れた」という意見が出たが、この作品の魅力はまさしくそこにあるだろう。

■「あの子と空を見上げる」青森県立青森中央高等学校

桃太郎伝説を寓話として扱いながら、現代の問題を描写した作品。その一つとしての移民問題、もっと直接的にはヨルダン川西岸の入植者問題のカリカチュアになっている。パレスチナ人とイスラエル人の青年二人が入植者の横暴をカメラに収めたドキュメンタリー映画「ノーアザーランド」を踏まえていると私には思えた。だが、もちろんそこに留まるわけではなく、マジョリティとマイノリティの立場が入れ替わるドラマには普遍性があった。ただ、観客自らが何かを発見する余地があまり残されていないようにも思ってしまった。

■「お手紙かみかみ」島根県立松江工業高等学校

「やぎさんゆうびん」の黒やぎさんは何故白やぎさんの手紙を食べてしまったのか、という一点だけで押し通した作品。話はそこに始まり、延々と無意味な会話を繰り返す内に段々と脱線していく。この構造はまさしく別役実の不条理劇そのもので、作者（教員）はさぞかしファンなのだろうと後で聞いたら、読んだことがないというから驚いた。不条理はかつて哲学と言われたが今はむしろナンセンスコトの領域で語られているように、この作品も大いに笑わせながら、しかし段々とファシズムの不気味さを提示していくのも見事。ただ最後が抒情に流れてしまったのが残念で、ドライに終わせる方法もあったかもしれない。

■「A Happy Christmas」香川県立善通寺第一高等学校

演劇は「ごっこ遊び」だ、ということを強く感じさせた作品だった。そもそも演劇部の部員達が稽古をしている「クリスマス会」にしても、その多くがクリスチャンではない私たち日本人がクリスチャンごっこをしていると考えてみると面白い。物語は部室での稽古時間と家庭での実生活の時間を往き来しながら進んで行き、ヤングケアラーの問題も採り入れながら最後は「家族ごっこ」となって、それまで亀裂の入っていた部員たちの関係がまとまっていく。「ごっこ遊び」の効用だろう。演出を磨けば更によくなる作品だと思えた。

■「愛を語らない」長野県松本美須ヶ丘高等学校

真実と虚構との関係を強く意識させた作品。真実を語るために虚構があり、虚構を通さなくては語れない真実がある。「自伝的小説」の戯曲化というパンフレットの説明を、観客は（私も）そんな作家は知らないと不明を恥じながらも疑うことなく観劇する。だが、これが真つ赤な嘘だったのだ。この嘘は劇中にも活かされていて、帽子だけの透明人間がその作家だったという仕掛けや、作家の娘・亜伊のことを語らないことこそが愛の証だったりと、嘘と知った後はギャフンという気持ちになった。一番大切なことを空白にして、それを伝えるために嘘を重ねていく痛快さ。群読の要素を用いた演出もレベルが高く、知的で突き抜けた演劇となっていた。

（桜美林大学 教授学群長）

『全国大会の舞台は観てて本当に楽しい。』

高橋 利明



心からそう思える3日間であった。

12作品の上演には高校生の見ている「現実」が紛れもなくあって、そんな現実と格闘する高校生たちの姿は無条件に美しかった。

市川学園市川高等学校「ばれ★ぎやる」

全国大会の開幕を飾るにふさわしい、破壊力満点の青春舞台だった。脚本を読んだ段階では伝わらなかった面白さが、パフォーマンスを通して客席にビンビン伝わってきて、とても楽しく観られた。特にサイトウ（最強女子バレー部員）役と母親役をひとりの男子が演じ分ける演出は秀逸だった。強い自分になる、そして母親を乗り越えるという高校演劇的な成長物語を今までにない表現方法で描こうとした意欲を高く評価したい。

鹿児島県立伊集院高等学校「朝は明けたり」

戦後8年間、米軍の統治下に置かれた奄美の歴史を掘り起こした、まさに「伝える価値」のある作品！そんな価値のある脚本を、丁寧な演技と美しい照明や舞台装置とで表現していて、演劇だからこそその説得力を持った素晴らしい作品に仕上がっていた。演じている生徒たちの姿から、脚本に対する共感が伝わってきて、観ている私たちも無理なく作品の世界に溶け込めた。

高田高等学校「第75回中部日本高等学校演劇大会 文部科学大臣賞受賞作品」

大仰なタイトルに反して、内容はとても素直な高校演劇部の話。上演校が中部大会で最優秀賞を受賞したその1週間後に、実際に能登半島地震が起こった。予期せぬ自然災害によって確実に失われるものがある。そんな耐え難い現実、多感な高校生たちが正面から立ち向かった作品だった。喪失感と格闘する生徒たちの姿に「愛しさ」が確実に感じられた。勇気ある上演姿勢に心からの拍手を送りたい。

神戸常盤女子高等学校「キャベツはどうした」

就職試験用の履歴書を書く女子高生3名の会話から浮かび上がってくる、自分自身や進路に対する不安や悩み。高校演劇にありがちな内容なのに、それ

がとても新鮮に感じられたのは、台詞が自然で、演技も生き生きとしていたからだろう。そんな彼女たちに絡む大人たちも、強烈な個性を発揮しつつ、彼女たちの世界に絶妙に馴染んでいた。入り口の扉と机だけというシンプルな装置だったからこそ、台詞に集中して上演を楽しめた。

千葉県立松戸高等学校「わたし」

スタッフ力の高さが随所に見られる上演であった。その一方で、キャストたちも真剣に作品と向き合って演じていて、とても好感が持てた。特に女子生徒たちがゴリラを演じる姿には、素直に感動させられた。「自分」と向き合うときに、そこに「自然」との関係を持ち込む視点到に叙情性が感じられて、とても心地よかった。完成度の高い上質な作品に仕上がっていた。

北海道網走南ヶ丘高等学校「はしれ、たくしい！」

1台のタクシーの中での様々な出会いを通して語られる人生ドラマ。男女2名のコロスが演じる「タクシー役」が、ドラマを軽妙かつスピーディに進行していて、時間を忘れて素直に楽しめた。その一方で、役者になるという夢をあきらめて、タクシー運転手としての生涯をまっとうするというストーリーが人生に対する応援歌になっていて、観る者に希望や励ましを与えてくれた。見終わったあとに清々しさが残る優れた上演だった。

北海道苫小牧東高等学校「やっぱり、こっちがいい」

高校生たちのたまり場になっている喫茶店で交わされる他愛のない会話の中に、とてもローカルな話題や、高校生のリアルがふんだんに盛り込まれていて、とても興味深かった。そんな高校生たちとは違った視点を持つ大人であるマスターの存在が対比的に描かれていて、作品に深みを持たせていた。途中で舞台を90°回転させて店内を別角度から見せる演出も見事だった。高校生目線で表現される舞台は新鮮で、無条件に楽しめた。

徳島県立城東高等学校「ポーチとピロティ、ストックヤード」

奥行きを生かして精緻に作り込まれた舞台装置にまず圧倒された。そしてそこで繰り広げられる会話が観る者を様々な世界に導いてくれる。そんな様々な世界をつなぐのが言葉ではなくイメージだとすると、舞台を観ている私たちの想像力が試される。観る者を困惑させる仕掛けに翻弄されつつ、「破壊」

に象徴される世界が見えてきたとき、「戦争」の絶えない現実には戦慄させられた。難解ではあったが、見ごたえ十分な上演であった。

青森県立青森中央高等学校「あの子と空を見上げる『アメイジング・グレイス』より」

タイトルのもつ「切なさ」が、お互いにわかり合えない人間同士のもどかしさをストレートに伝えてくれる。素舞台で、しかも生の声によるスムーズかつスピーディな舞台転換はこの部の十八番で、何度観ても感心させられる。よく練習しているとわかる役者たちの動きや歌も素晴しかった。カメラで撮られ拡散される現実にはわたしたちは心を痛める。「イマジン（忌野清志郎訳）」の歌声が今も耳に焼き付いて離れない。

島根県立松江工業高等学校「お手紙かみかみ」

前説で客席の全員に「やぎさんゆうびん」を歌わせる趣向での幕開きに、お見事！と感嘆。そしてその後展開されるこの歌を終わらせるのは黒やぎさんか白やぎさんかというとぼけた議論が、抜群に面白かった。民主的な議論の大切さに、不吉な「万歳！」の響きを重ねて、全体主義の恐ろしさを観客に感じさせる手法もお見事。台詞の面白さをストレートに伝えてくれる上演だった。

香川県立善通寺第一高等学校「A Happy Christmas」

本番を目前にひかえた演劇部、部員同士のぎくしゃくした雰囲気、とてもリアルに演じられていた。劇中劇を通して語られる現実や親に対する不満が、クリスマスという浮かれた雰囲気の中で溶かされていくという展開にこの作品の魅力を感じた。また、群像劇として、スタッフの重要性にもしっかりと光が当てられていて、この部が持つ雰囲気の良さがとてもよく伝わってきた。

長野県松本美須ヶ丘高等学校「愛を語らない」

今大会の最後を締めくくるにふさわしい、とても完成度の高い上演であった。娘の視点で語られる、クズとしか言いようのない小説家の父親に翻弄される家族の物語を通して、そこに紛れもなく存在した「愛」を浮かび上がらせる脚本の構造も見事だし、上演を支える役者やスタッフの力量も突出していて、何度でも観たくなる作品に仕上がっていた。父親の存在を帽子のみで表現する演出はどこかでオマージュ？したくなった。

『お芝居の価値』

藪 博 晶



全国大会審査員という大役を仰せつかりプレッシャーを感じていたのですが、終わってみれば、最高級の12本の上演を一番良い

席で観させていただき、6名のスペシャリストの先生方のお話を間近でたっぷりと聞かせていただき、何とも贅沢な時間を過ごすことができました。様々な刺激を受け、「良いお芝居とは何だろう?」「お芝居の価値とは何だろう?」というのを改めて深く考えた3日間でした。

市川学園市川高等学校『ばれ★ぎゃる』

とにかく全力。お客さんを楽しませるためにありとあらゆるネタをこれでもかと詰め込み、それを力いっぱいやりきる。それがとにかく心地良かったです。一方、主人公が悩み、葛藤しながら必死で前進していこうとする様子には嘘がなく、「自分とは何か」「強さとは何か」という普遍的なテーマに、高校生の立場から非常に真摯に向き合っている作品でもあると思いました。爆笑・共感・感動、三拍子そろった最高のエンタメ作品でした。

鹿児島県立伊集院高等学校『朝は明けたり』

登場人物の描き方が魅力的でした。カッコいいだけでなく、時にコミカルでかっこ悪く描いてくれることで、どうしてもなく愛おしく感じさせてくれました。そのおかげで、それがただの「歴史」ではなく、「生きた人間の物語」として胸に伝わってきました。令和を生きる我々と、戦後の奄美大島の人々をつないでくれる、非常に価値あるお芝居だったと思います。

高田高等学校『第76回中部日本高等学校演劇大会 文部科学大臣賞受賞作品』

高田高校が石川で行われた中部大会で最優秀賞(文部科学大臣賞だったはずのもの)を受賞したのは2023年末、今の高三生が高一だった時ですね。その直後に起こった大震災。その衝撃は大変なものだったと思います。実際にあった災害をテーマに創作を行うのは覚悟のいることですが、この作品は、自分たちが実際に受けた衝撃と真剣に向き合って製作されたように感じられました。登場人物の心の痛みがひしひしと伝わってくる作品でした。

神戸常盤女子高等学校『キャベツはどうした?』

とにかく役者が生き生きとしていました。「もっとこの人達を見ていたい」と思わせてくれる作品でした。「履歴書を書く」という設定は非常にシンプルかつ身近なものです。この登場人物たちの魅力を引き出すうえではドンピシャの設定だったと思います。脚本が役者を引き立て、役者が脚本を引き立てる、そんな理想的な演劇として仕上がっていたのではないかと思います。

千葉県立松戸高等学校『わたし』

ゴリラが高校生になって教室にやってくる。一見コントのような設定で、実際たくさん笑いましたが、女子高生とゴリラという種の違いを超えた二人(二頭?)の寂しさがつながっていく様子には胸を打たれました。戦争や自然破壊といった非常に大きなテーマが無理なく懐に入ってきたのも、そこにある「寂しさ」に寄り添うことができたからだと思います。二人が貨物列車で海に向かうシーンはとても胸に沁みました。感動的な作品でした。

北海道網走南ヶ丘高等学校『はしれ、たくしい!』

舞台ってこんなに自由なのか、と、目からウロコが落ちる思いでした。役者の力と舞台装置の力、そしてユニークな発想の数々によって、本当にタクシーが生きて動いているかのように見えました。そして、そんな自由な表現によって描かれる主人公・拓志の人生は、思い通りにならないながらも一生懸命に生きることがどれほど彩に溢れているかを教えてくれました。全ての人の人生を肯定してくれる、素敵な作品でした。

北海道苫小牧東高等学校『やっぱり、こっちがいい』

おそらく、今回の12本の中で最も高校生の実感のこもった作品だったのではないのでしょうか。自分の身近にあるものの価値というのは気づきにくいものですが、高校生のリアルな日常会話やあるあるネタなど、高校生にとっての「当たり前」に焦点を当て、作品として仕上げたことは称賛に値すると思います。高校生にしか作れない、興味深い作品でした。

徳島県立城東高等学校『ポーチとピロティ、ストックヤード』

廃墟のような街とストックヤード、その向こうに学校の中庭。この不思議な三層構造と「演劇部」という設定が重なって、何が現実で何が虚構なのかが曖昧な、奇妙な迷路に迷い込んだような感覚でした。劇全体を戦争批判として解釈することもできると思いますが、それすらも虚構で、安全な場所にいな

ら戦争をネタにして劇を作っている自分たちへの批判なのではないか、とも考えられる、本当に多様な面を持った作品だと感じました。

青森県立青森中央高等学校『あの子と空を見上げる』

切迫感がありました。作中の鬼ヶ島の状況を、私はパレスチナの問題と重ねながら見たのですが、それだけに留まらず、世界のあらゆる場所で起きている戦争や分断に対する切実な危機感が伝わってきました。それを可能にしていたのはやはり役者の力だと思います。役者の表現する感情、体から溢れるパワーが、劇全体の切迫感をしっかりと裏打ちしていたように思います。今だからこそ上演する価値がある、多くの人に見てほしい作品だと感じました。

島根県立松江工業高等学校『お手紙かみかみ』

まず開演前の口上で心をつかまれ、まんまと歌を歌われ、かと思いきや歌ったことをおちょくられ、そこでもう完全にこの芝居のペースに飲み込まれてしまいました。最も魅力的だったのは役者が良い意味で「遊んでいる」ように感じられたことです。全国大会という大舞台にも関わらず、緊張を感じさせることなく、力まずのびのびと舞台を楽しんでいたように見えました。その「遊び」に観客を誘い込み、一緒に楽しむ。そんな一時間だったように思います。

香川県立善通寺第一高等学校『A Happy Christmas』

現実と劇中劇を交互に見せることでお客さんを飽きさせることなくストーリーを運んでいく、演劇部という設定の強みを最大限に生かした作品だったと思います。また、部活に対する思いのすれ違いから人間関係がぎくしゃくするというのも、多くの演劇部員が共感できるテーマだと思います。演劇部という、自分たちにとって一番身近にあるテーマをよく見つめ、そこにある感情の機微を丁寧に汲み取った良作でした。

長野県松本美須ヶ丘高等学校『愛を語らない』

大事なことは語らない。それを体現した舞台でした。台詞で必要以上に説明しない。派手な演技で訴えかけない。過剰な音響や照明で盛り上げない。けれども登場人物の心の微細な部分までしっかりと伝わってくる。私が最も心に残ったのは、春子が亜伊に「帰りましょう」と言うシーンです。たった一言で春子の愛情深さや強さ、亜伊の心の動きまで全て表現されていました。役者・スタッフ全員が作品のことを本当に深く理解し、互いに協調できていないとこういうシーンは作れないと思います。高いチームワークによって作り上げられた、圧巻の舞台でした。

(兵庫県立舞子高等学校 教諭)

高校演劇を憂える

中原 久典



皆さんの上演を観てから言っているわけではありません。

この全国大会を目指し、各都道府県で行われるコンクールで上演した学校は10年前の2015年には

2000校弱ありました。それが昨年のコンクールでの上演校は全国で1570校ほど。この10年で急速な減少。少子化の影響により、演劇部に限らず部活動の在り方が問われています。高校演劇は、いつまで持続可能なのだろうか。全国大会に臨むにあたり、そんなことを考えながら、みなさんの舞台を拝見しました。

上演① 市川学園市川高校 ばれ★ぎやる

部員全員がギャルというバレエ部、破天荒な登場人物、突然起こるタイムスリップなど、無理くりな発想と物語が、疾走感に徹した演出により 高校生エンターテインメント活劇に仕上がっていました。お母さん役と相手校の選手役を同一人物が演じることをクライマックスの展開と笑いにつなげていることも秀逸でした。難点は複数のドラマが混在していること。

上演② 鹿児島県立伊集院高校 朝は明けたり

奄美群島の本土返還という史実に真っ向から向き合ったその姿勢と意欲に敬意を表します。演劇の持つ大きな一つの意義を感じました。冒頭のゆっくりと上がる紗幕に当時の時代の流れを感じ、ドキュメンタリーの持つ社会性と演劇の持つドラマ性が融合した1時間でした。最後の写真の力強さとドラマティックな再会の場面、どちらも良いだけに焦点がずれたことが残念です。

上演③ 高田高校 第76回中部日本高等学校演劇大会 文部科学大臣賞受賞作品

震災で行方不明となったカナデ、彼女への思いを持ち続けるミサキ。2人の関係を主軸に、「好き」というキーワードとともに展開し、テーマ曲が真つすぐに観客に届きます。エチュードにより、ミサキが現実と向き合う展開も面白く感じました。物語の前半で、カナデがすでにいないということがわかるため、その後の展開で物語を動かす別の要素も必要だと感じました。

上演④ 神戸常盤女子高校 キャベツはどうした?

とにかく絶妙なバランスで成立している作品。女

子生徒3人の微妙な関係、2人の母親のコントラスト、シンプルさの中にある複雑な感情など、上手く展開していきます。トモエと母親が進路で衝突する場面で説教っぽくなるかと思いきや、緑のお母さんを登場させ笑いにつなげる、話の展開も上手い。部全体で創りあげたことが伝わりました。よりよい演劇部の形を見たように思います。

上演⑤ 千葉県立松戸高校 わたし

ゴリラが転校してくるという設定は不条理ながらも現代を見ているようで、すんなり入ることができません。スピーディな展開も無理なくついていけるのは、演出が行き届いている証拠。環境問題を扱っているようで、今なお続く世界各地での人権侵害への警鐘にも見えます。登場人物の葛藤をじっくり感じることであれば、最後はもっと心に響いたように思いました。

上演⑥ 北海道網走南ヶ丘高等学校 はしれ、たっくし!

出来事が短編で描かれていくため、これで1時間持つのかだろうかと考えて観ていました。が、なんのなんの、見事にドライバーの人生をタクシーに乗せて描き切りました。タクシーA、Bの存在が利いています。演劇ならではのしかけです。考えれば、人生を歩む時間は連続していますが、過去の出来事は断片的に記憶に残ります。そうした点も上手く表現できていました。

上演⑦ 北海道苫小牧東高校 やっぱ、こっちがいい

どこかにありそうな喫茶店の中で行われる高校生の恋愛トーク。そこから見えるのは同じ事象でも人によって見え方や捉え方は違うという個別性。快活に見えながらも、今を懸命に生きている高校生の今が見えてきます。残念なのは意図的に入れた男子生徒2人のコントシーンが長いなど、途中、展開が停滞したように感じたことです。

上演⑧ 徳島県立城東高校 ポーチとピロティ、ストックヤード

講評では厳しいことを申し上げましたが、役者どうしのコミュニケーション、スタッフワークの見事さ、舞台装置の創り込み等、上演に向けたチームとしてのレベルの高さを強く感じたのは事実です。観客を意識した脚本と演出の整理により、可能性が広がる作品です。わかりやすければ良いということではありませんが、観客に考察させる余地は必要です。

上演⑨ 青森県立青森中央高校 あの子と空を見上げる。

いつもながらのストレートにパワーを感じる力強い舞台。モモカの孤独感、コスズとの距離感等、素舞台であることを最大限に活かした演出の巧みさ。

合唱、空襲警報の響きが、作品に深みを与えていました。今回の新たな要素である「動画配信」が、見上げると広がる空には国境がないことを訴えかけます。ただ、ただ、アメイジンググレイスと多くが重なっていたことから、ラストは別の展開を期待してしまいました。

上演⑩ 島根県立松江工業高校 お手紙かみかみ

素朴な語り口調による前説が舞台と客席の距離を一気に縮め、観客の大合唱による幕開けに持っていく。全国大会の最高の観客を味方につけた上演でした。ずるいなあ、そしておもしろかったなあ。あんなに暗転で笑ったことがあったかしら。「よしませるか…」という台詞が現在の世界情勢を想起させます。見終わった後は納得感がありましたが、テーマと題材の必然性と妥当性に疑問が湧きました。

上演⑪ 香川県立普通寺第一高校 A Happy Christmas

部活の問題、家族との関係、進路や将来の夢など、自分たちの身近な問題を劇中劇を通して、提起しようとする姿勢に好感が持てました。エチュードにより、お互いの関係を再構築する発想も良いと思います。それらが観客に伝わったかは、検証が必要です。劇作の難しいところです。出来上がった作品を、多くの人に観てもらいながらブラッシュアップすることが大切です。

上演⑫ 長野県松本美須ヶ丘高校 愛を語らない

この小説を戯曲化する意味は?それを高校生が演じる意義は?なんてことを考えながら観ていました。演者、舞台、照明、音響、衣装等、すべてが高いレベルで調和し、観客をぐいぐい引き込んでいきます。叙情的になりすぎず、くすっと笑いを誘う洒落っ気たっぷりな展開。情緒的にならないラストも、素敵です。次第に、自分の親や子どものことを考えました。そうか、描きたかったのはこれか!と納得…からの衝撃の事実。いやあ、やられました。

ハイレベルな上演の連続に圧倒された3日間でした。高校演劇はまだまだ元気です。多様性が問われる時代ですが、高校演劇が多様なのは今に始まったことではありません。大切な文化です。聞くとところによると、演劇部として加盟している学校は1900校ほどあるのだそう。課題は、上演まで辿り着けない高校がたくさんあるということ。高校演劇を経験した皆さんには、これからも何らかの形で演劇と接点を持ってもらいたい。できたら、顧問で帰ってきてほしい。「ああ!あの香川大会で、あの作品を上演されたんですね!」そんなお話ができることを夢見ています。高校演劇は永遠です。

(大分県立大分豊府高校外部指導者)

第1分科会 「演出の方法を学ぶ」

講師 須藤 黄英／参加者 90名

演出の講習会場では、翻訳劇「星降る夜に出掛けよう」という脚本をもとに、ワークショップが行われた。須藤黄英さんを講師にお迎えし、実際に役を演じながら須藤さんに演出をつけてもらった。参加した高校生たちは、演出によって彩られていく役者の様子を真剣な眼差しで見ている。そして時に頷き、時に笑いながらメモを取って演出の方法を学んでいた。

須藤さんはセリフの解釈や、ト書きの意味などを参加者に考えさせながら進めてくださり、ワークショップの後半には高校生のほうから演技プランや演出プランの提案をすることもあった。参加した全員にとって、実りあるワークショップになった。

(文責 海部高校 松田恵利奈)



第2分科会 「群 読」

講師 能 祖 将 夫／参加者 80名



2班に分かれ、輪になり1班が群読し、残りの班はその後ろで鑑賞した。前半は「銀河鉄道の夜」を群読し、徐々に身振り手振りをつけたり、迫力ある群読で雰囲気を出したりと、その面白さを味わった。後半は20名1組で「タイタニック」の緊迫した場面を群読し、途中からBGMを流しながら演じた。台詞だけでなく身体表現・音楽も取り入れ、枠にとらわれず演じる群読の妙と鑑賞側の面白さも同時に味わった。

(文責 三木高校 吉田純子)

第3分科会 「演劇は人間を描くもの」

講師 西 村 和 宏／参加者 52名

前半のワークショップでは、知り合いではない者同士で2人組になり「操る人操られる人」、3人一組で輪になり2人が目を閉じた状態で談笑しながら教室を移動するなどのウォーミングアップを行った。さらに、2～4人一組で「掃除機」「カブトムシ」「四国と言えば」などのお題に沿った身体表現をした。

後半は、4人一組で「三者面談のシーン」を演じた。高3の進路相談の場で生徒が初めて本心を打ち明けるという設定で生徒、母親、先生、演出家役に分かれ、制限時間内に各グループが工夫を凝らした演技を披露し、会場は笑いと拍手に包まれた。

最後に、講師の西村先生より「演劇は人間(人生)を描くものである。そこに描かれる葛藤(Coflict)が強くなればなるほど面白く、時代を超えて楽しめるものになる」という言葉をいただいた。参加者は全国から集った仲間との交流を楽しみながら積極的に活動していた。

(文責 丸亀城西高校 秋山智子)



第4分科会

「創造力の扉を開ける」

講師 仙石 桂子／参加者 34名



仙石先生の指導のもと、アシスタント・顧問を含めた参加者計34人が7班に分かれてワークショップを行った。アイスブレーキングの後、絵画カードからピンときた1枚を選び、ここから創造できるワンアクションを表現した。本来の絵画のタイトルとは別に、自分たちの演出にタイトルをつける。日頃の表現活動の中で創造力の枯渇を感じる時、違うアート作品との出会いが別の創造力の扉を開け、それが次の創作活動に繋がっていくことを学んだワークショップであった。

(文責 飯山高校 細川悦代)

第5分科会

舞台技術創造講習(報告)

参加者169名

舞台技術創造講習では、演劇に携わる様々な分野のプロの方々から、舞台技術について学んだ。はじめに、プロと丸亀高校、高松工芸高校の演劇部員で作り上げた、「ラースヴェト(夜明け前)」(10分芝居)が上演された。その後、演出・舞台美術・照明・音響の方々から、その上演について解説をしていただいた。講習会で今、この瞬間、初めて目にした上演における演出等であったため、参加者は真剣に耳を傾けていた。座談会、質疑応答、バックステージツアーも行っていた



だき、実際に参加者が舞台に上がり、プロの方々の技を目の当たりにすることができた。「演劇は総合芸術と言われているように、それぞれ独立しているけれど、コミュニケーションをとり、一つの作品をつくるために力を合わせるチームワークが大切」とおっしゃっていたのが印象的であった。今まで以上に舞台作りが楽しくなるような、有意義な講習会だった。

(文責 海部高校 生垣千尋)

第6分科会

生徒講評ワークショップ(報告)

参加者26名

豊嶋了子先生(香川・観音寺第一)によるエクササイズを通じて、緊張していた26名が徐々に打ち解け、笑顔になっていった。3つのグループに分かれ、上演作品についての話し合いを行った。「大切なことは劇全体



を素直に楽しむこと。分析や考察よりも自分自身が何をどう受け取って感動したのかを大事にしてほしい」という豊嶋先生の言葉を聞いて、皆が真剣に話し合っていた。グループでの意見共有の後、総評として西堂行人先生より、「講評文は自分だけの考えを書くのではなく、仲間と共に書くという気持ちで書いてほしい。演劇を通して世界や社会が見えてくる。これからも演劇と長く関わってほしい」という言葉をいただき、講習会は終了した。

(文責 伊予高校 和泉由香)

かがわ総文と優秀校東京公演を終えて

「夢のまた夢のその先で」

かがわ総文祭に出場できると決まったあの関東大会の夜から、私たちの夏は一気に加速しました。文化祭は記憶がないし、松本公演をしたことなんて遠く昔の話に感じるし、栃木公演の楽屋でじゃがいも焼きそばを食べたことも、そこでたくさんのあたたかい言葉をいただいたことも、すべてこの半年で起きたこととは信じられないほどです。

香川県に到着してからのリハーサルも、息を切らして臨んだ生徒交流会も楽しくてあっという間で、全国大会が始まってしまうのが名残惜しい気持ちがしたのを覚えています。いざ幕が上がった全国大会はどの高校も圧巻で、会場にいる誰もが演劇が好きだという思いが伝わってくるようでした。時には思いっきり笑ったり、鼻をすする音が聞こえたり、時間が止まったかのように思える時もありました。緊張もありましたが、一つ一つの公演を楽しもうという気持ちの方が自然と強かったです。

迎えた3日目、私たちの本番の日。全員緊張したような面持ちで心配でしたが、練習を始めるにつれて全員の顔が明るく変わっていくのが何より嬉しかったです。他のどの高校とも違う、私たちの舞台を届けられるようにと全員の気持ちがひとつになっていきました。開演3分前、2ベルの音でやっと大道具に立ってからは本当に一瞬でした。宙を舞う原稿と降りていく緞帳がどうしても楽しくて切なくて、つい笑い泣きをしてしまいました。あの一瞬を、そしてみんなの表情を私は忘れられません。

その後、やりきったとは思いながらも緊張して12番目の講評を待ちました。部長と舞台袖に向かい、そこで聞いた最優秀賞。全国大会に出場することすら夢のまた夢だった私たちは、想像すらしていなかった最優秀賞に手が届いたのです。信じられない気持ちでした。仲間たちとこの「愛を語らない」をもう一度上演できることが何より嬉しかったです。

東京公演が決まってからは、私たちのホームグラウンドでもある上土劇場での公演も行いました。たくさんの方々のおかげで席は満員、立ち見席が出るほどでした。後輩からのサプライズやカーテンコール、全員のやりたいが詰まった1日はとても充実したものになりました。

そして迎えた東京公演。3年生の卒業公演でもあり、とにかく楽しんで演じようと心に決めていました。新国立劇場の舞台は本当に全てが楽しくて、緞帳が閉まった時、これで終わりだなという思いとやりきった思いでいっぱいでした。緞帳前インタビューでお客様の笑顔を自分の目で見られたことは何よりの思い出です。

改めて思い返すと、私たちの夏は本当に濃密で、やはりあっという間でした。この経験は一生忘れられない宝物であり、仲間と共に過ごした日々は私の誇りです。そして、私が柴山亜伊として舞台に立てたのは、全ての応援してくださった皆様と部員たちのおかげです。

みんなありがとう。今日は月が綺麗ですね。

(長野県松本美須ヶ丘高校3年 荻澤 杏)

「キャベツはどうした？」を終えて

私が神戸常盤女子高等学校演劇部顧問を拝命したのが十数年前。退職される前顧問の先生に部費(小銭数百円ほど)が入った瓶を、「がんばってね。」と突然手渡されたところから始まります。その当時は、部員と子どもコンクールに出場することすら全く考えたこともなく、そもそも高校演劇にコンクールがあることすら知りませんでした。それが、数年かけてだんだんとやる気のある生徒が集まり、コンクールに出場したいと言い出しました。演劇の経験が全くなかった私はその時、「エライことになってしまった。」と心底思いました。しかし、生徒たちの熱意に押され「今回だけで？」ということで、しぶしぶ一緒に芝居作りを始めてしまったのが運の尽き、そこからは高校演劇の魅力に取りつかれ、今に至るわけです。

全く大変な世界に足を踏み入れてしまったものです。芝居作りを始めるにあたっては、神戸の高校演劇の諸先輩方には、演劇について何も知らない若輩者に一からご指導ご鞭撻いただき、導いていただきました。そのご恩にはいくら感謝してもしきれません。

それから生徒と共に芝居作りに没頭し、生徒顧問創作「侑山や百貨店」として十の作品が生み出されました。「キャベツはどうした？」は記念すべき十作品目であり、我々を最高の舞台に連れて行ってくれた愛すべき作品です。

「侑山や百貨店」作「キャベツはどうした？」。あまり覚えていないのですが、タイトルから先に決まったような気がします。高卒就職をテーマにしたお芝居を作ろうということで、就職担当の先生や実際に就職活動をした先輩方に話を聞く中で、部員みんなで色々と話し合い、だんだんとイメージがつくられていきました。一応の形ができたのが昨年の8月末なので、ほぼ1年間の付き合いということになります。本当に長い付き合いでした。上演は10回を数え、本校演劇部初となる校外単独公演を地元神戸市長田区ピフレホールでさせていただくという機会も得ました。お客様の中には「キャベツはどうした？」に何度も足をお運びいただき、全ての上演をご覧になったという方もいらっしゃると思います。本当に光栄なことです。

改めて「キャベツはどうした？」に関わっていただいた皆様、観ていただいたお客様、香川全国総文・新国立劇場優秀校公演の運営に携わっていただいた方々、共に上演させていただき交流を深めた出演校の仲間達、すべての方に心から感謝を申し上げます。たくさんの素晴らしい機会を頂き、すべてが夢のこのように思い出されます。部員にとっても私にとっても、本当に奇跡のような経験でした。この経験を糧に、「侑山や百貨店」一同これからも精進していきます。本当にありがとうございました。

(神戸常盤女子高等学校演劇部顧問 佐藤 慎)

かがわ総文と優秀校東京公演を終えて

私たちは、「はしれ、たくしい！」と約一年向き合ってきました。地区大会から始まり、全道大会を経て、迎えた全国大会。誰一人欠けることなく、部員みんなで全国大会という大きな舞台上で上演できたことを大変嬉しく思います。

今年の全国大会は、常連校が名を連ねていました。戦争や震災、等身大の高校生の恋愛ものまで幅広いジャンルの作品を観劇することができ、圧倒されたとともに、新たな発見や学びを多く得られた大会でした。そして緊張の結果発表。私たちは優秀賞に選ばれ、舞台美術賞も受賞しました。嬉しさよりも驚きが勝ちましたが、新国立劇場で上演ができるということに感謝の気持ちでいっぱいでした。

迎えた東京公演の遠征。新国立劇場は綺麗で、舞台上は広く、搬入口の扉は高く、「ひろっ!」「でっか!!」と圧倒されました。リハーサルでは、始まる前にスタッフさんが山台を組んでくださっていたり、釘の打ち方のコツを教えてください、私たちが最高の舞台を届けられるようにと真剣に向き合ってくださいましたことに胸が熱くなりました。また、ゲネプロでは上演校の皆さんが観に来てくださり、50人近くのお客様が入った中で行わせていただきました。1人でもお客様がいれば、それは稽古ではなく本番です。本番の機会を2回もいただけたことがとても嬉しかったです。

私たちが宿泊したオリンピックセンターには、他校の皆さんも宿泊しており、多くの方々と交流する機会がありました。演劇の話をして盛り上がったり、怪談で楽しんだり、一期一会のメンバーでしか味わうことのない体験は、私にとっての大切な宝物となりました。

楽しい時間はあっという間に過ぎていき、ついに上演日当日。正真正銘、人生最後の「はしれ、たくしい！」となりました。新国立劇場という日本の最高峰の舞台上で上演ができるという嬉しさ、緊張、そしてもう終わってしまうという寂しさ、という心境で臨みました。ラストシーンでは、今までの演劇部生活が走馬灯のように思い出され、涙が止まらなかったことを今も覚えています。幕が下りたとき、観客の皆さんの拍手がとても温かく、ここまで来ることができて幸せだ、と強く思いました。

私たちの「はしれ、たくしい！」は、何度も上演をさせていただいた中で、見てくださった皆さまのご感想を参考に、より良い作品にすべく、試行錯誤を重ねてきました。全国大会で優秀賞をいただくことができたのも、この作品に関わってくださった全ての皆さまのご支援・ご声援があったからこそだと思っています。この場をお借りして、感謝申し上げます。ありがとうございました。網走南ケ丘高校演劇部はフルスピードで駆け抜けていきますので、これからも温かい応援をよろしくお願い致します!!

(北海道網走南ケ丘高等学校3年 浮須 翼)

ちゃんとしなければ

この舞台が3年生にとって千秋楽。

「爆発してやる」

そう思った。今までの稽古はこの日の為にあつたのだ。ここで全力を出し切らなくては。部員たちの間に緊張が走る。緞帳が上がって、モモカ先輩の台詞から「あの子と空を見上げる」が始まった。なんと最後までミスはなかった。全力を出せた。今までで一番良かった。そう確信した。演技の集中が切れることはなかった。60分という、長いようで短い時間、舞台の上で「生きた」のだ。終演後は満足感があつた。この劇を完成させた。そう思った。

結果は、優秀賞を受賞することが出来た。最優秀賞には手が届かなかったが、嬉しかった。半数が入部して間もない1年生という状況で、この結果を残せたことを誇りに思った。先輩たちの作り上げた「あの青森中央」という伝統。そのプレッシャーが、全員の背中に掛かっていた。それでも演じ切ったという事実、ひたすら喜びを感じる。

優秀賞を頂いたことで優秀校東京公演が確定した。ありがたいことに2年連続。去年を思い出してみる。精神的にも身体的にも未熟だった去年と比べ、私が成長したところは何処だろう。その問いの答えを探し、いざ新国立劇場へ。

新国立劇場。相変わらず大きい。大きいというより、デカい。スケールが違う。圧巻だ。私達は今からこの舞台に立つのか。そう考えると鳥肌が立った。恐怖ではない。「この舞台で演じる。」という事実、ひたすら打ちのめされた。

稽古は本番ギリギリまで続いた。細かいところの修正。ネタの追加。それを本番の朝も行った。最後の最後まで劇の完成度を高めるため、全員で協力して動く。あっという間に本番がやってきた。

モモカ先輩のセリフから始まり、最後まで。またあの感覚だった。完成させたという感覚。役者の立場で感じていいことなのかどうかわからないけど、それくらい集中して臨んだ。60分が凄く短く感じた。緊張もあったが、楽しみながら演じることができた。

寂しさの中で、自分の問いの答えを考える。答えはきっと、「姿勢」だ。劇に向き合う「姿勢」部活に向き合う「姿勢」。そういう物事に対する「姿勢」をちゃんとしなければならぬ。そう考えることができるようになった。これに気付けたのも、素晴らしい上演を見せてくれた他校の仲間たち。そして、先輩方含むチームメイトのおかげである。これからも、自分に驕る事なく、努力を続けていきたい。

(青森県立青森中央高等学校2年 相馬 奏)

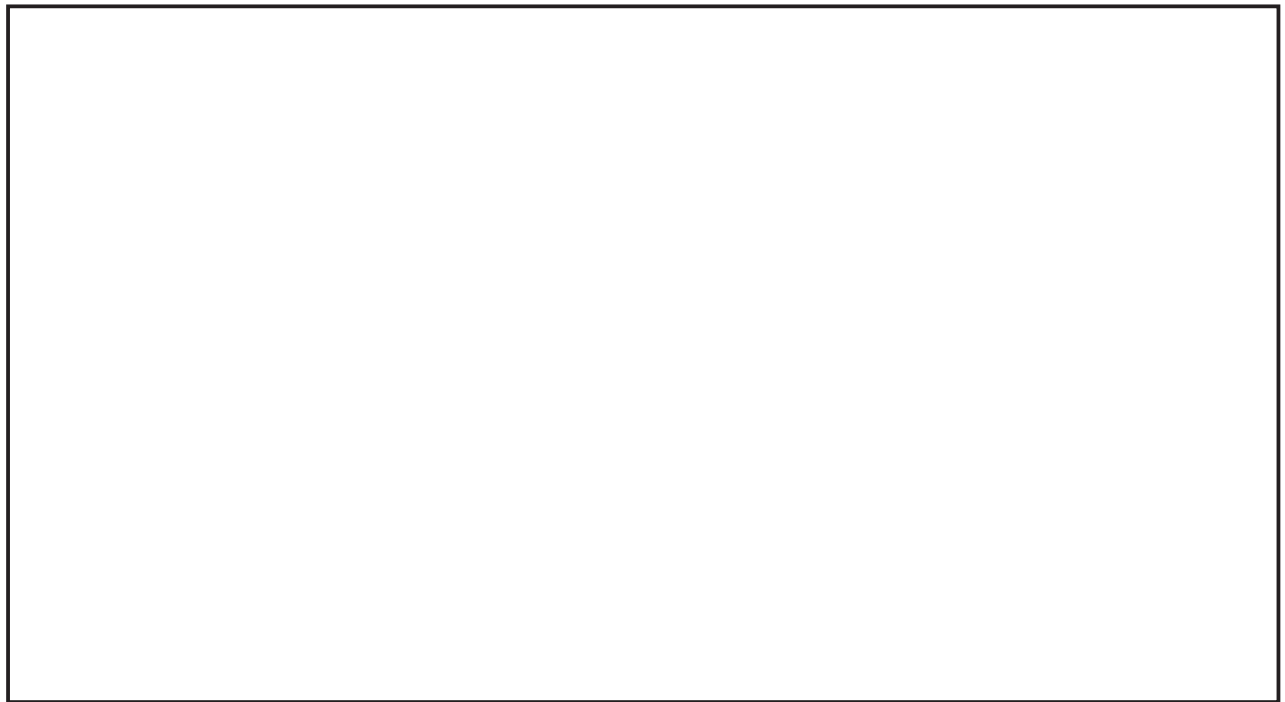
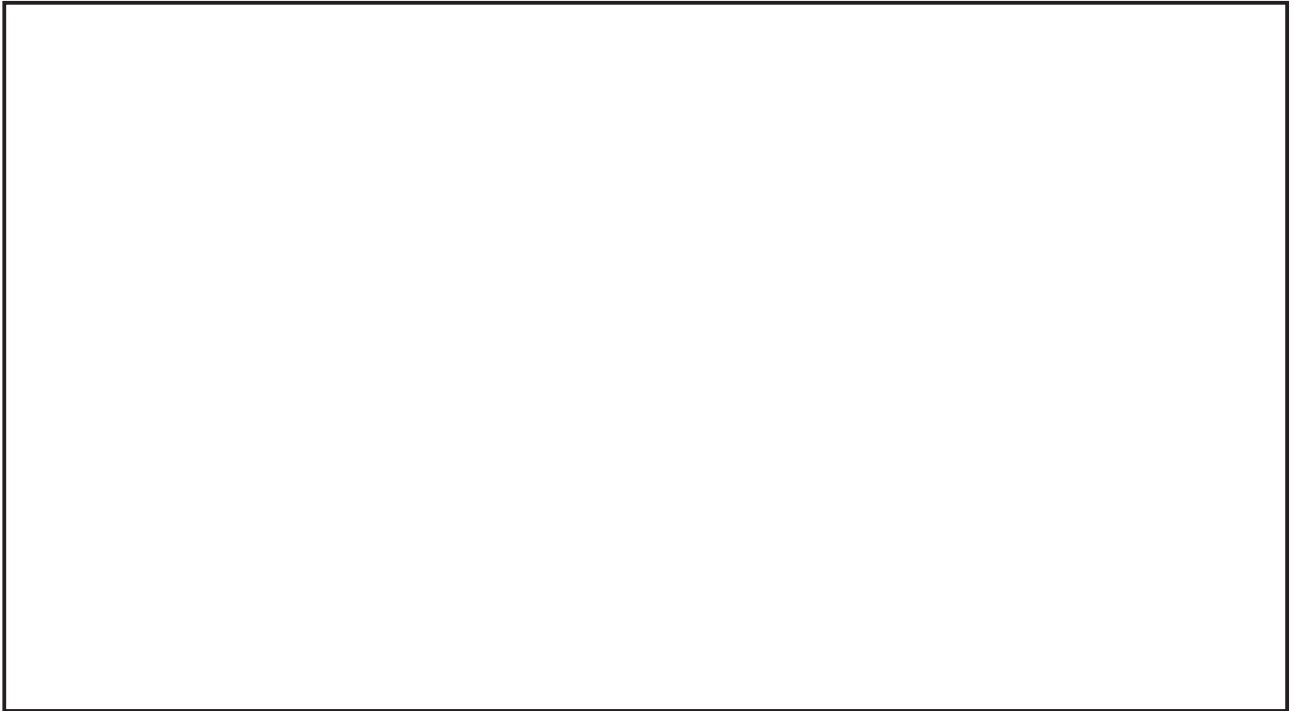
事務局通信

演劇創造担当になり二度目の事務局通信になります。今夏の最大のトピックは優秀校東京公演の東京都枠が初めてない年になったことでしょうか。(都大会での優秀校東京公演東京都枠は関東高校演劇サマーフェスティバル東京都代表枠になりました。) 今後は上位4校の公演も縮小の流れですし、今まで当たり前だったものがまたひとつまたひとつとなくなっていくと思います。本当に寂しいものです。

全国の理事会でも演劇部の部員の減少や、部そのものの減少も各ブロックから盛んに取り上げられ、今後合同チームでの大会出場などもどう考えていくかということがかなり話題となりました。人口減社会、少子化社会の中ですからこれは高校演劇界に限ったことではなく高校スポーツ界や他の文化系の界限でも同様のことがいわれていますが、少ないパイでの競争の中どう演劇の魅力を世間の中学生・高校生に広めていくか、そして関わりたいと思う仕掛けをつくっていくか、今までの各校演劇部のひたむきな部員獲得の努力だけでなく、大きな枠組みで考えていかなければならないのかもしれないかもしれません。

厳しい話ばかりですが、そんな中で香川大会では海を臨むすてきなサンポートホールで代表各校が素晴らしい上演の数々を繰り広げてくれました。上演校の皆様、本当にありがとうございました。なお来年2026年は秋田県大館市のほくしか鹿鳴ホールで7月30日(木)から8月1日(土)の開催になります。(2027年は石川県での開催を予定) また春季大会は、2026年は新潟県新潟市のりゅーとびあ新潟市民芸術文化会館で3月20日(金)から22日(日)の開催となります。(2027年は大阪府での開催を予定) 皆様、またよろしく願いいたします。

(事務局 森田 俊一)



2024年度 全国高等学校演劇協議会決算報告

＜一般会計＞				
収入の部				
大項目	小項目	予算額	決算額	摘 要
基本収入	会費	3,700,000	3,594,000	2000円×1797校分
その他の収入	活動報告広告	700,000	770,000	「活動報告集」広告掲載料
	寄付金	60,000	20,000	「演劇創造」広告掲載料等
	芸文振より	2,000,000	2,000,000	芸文振からの助成金
	高文連より	200,000	200,000	高文連より活動補助・旅費
	利息	35	3,291	ゆうちょ銀行・みずほ銀行
繰越金	前年度より	-644,667	-644,667	繰越金
民間支援	特別協賛金	3,000,000	3,000,000	東京工科大学 日本工学院
	協賛金	930,000	930,000	四国学院・桐朋芸術短大・NHK
合 計		9,945,368	9,872,624	
支出の部				
大項目	小項目	予算額	決算額	摘 要
管理費	旅費・交通費	2,500,000	1,842,012	岐阜・広島 事務局会議旅費等
	通信費	70,000	52,504	切手、送料、振込手数料等
	印刷費	130,000	165,490	賞状、封筒等
	消耗品費	20,000	5,742	文具、コピー等
	事務局維持費	70,000	70,000	事務局長行動費、会議室代等
	雑費	50,000	35,839	zoom、HP関係、謝礼等
	事業費	750,000	235,400	演劇創造150号、発送費
	ブロック連絡費	9,500	7,560	各ブロックへの振込費用等(R6.5月～R7.6月)
事業費	活動報告発行	700,000	684,300	各都道府県活動報告集
	渉外費	50,000	0	全国大会関係・弔慰金
加盟費	高文連加盟費	100,000	100,000	
大会運営費	各ブロック大会	2,000,000	2,000,000	芸文振からの助成金(各ブロックへ補助)
	各ブロック大会	2,000,000	2,000,000	日本工学院支援金(各ブロック25万円)
	全国大会	500,000	500,000	日本工学院支援 (岐阜、チラシ5万円含)
	舞台技術講習会	400,000	62,286	舞台技術講習会補助
	春季全国大会	100,000	100,000	特別会計へ
	予備費	495,868	0	
合 計		9,945,368	7,861,133	

2,011,491 (2025年度一般会計へ)

＜特別会計＞				
収入の部				
大項目	小項目	予算額	決算額	摘 要
補助金	全国高文連	200,000	200,000	全国高文連活動補助費
	全国高演協	100,000	100,000	一般会計より
民間支援	協賛金	300,000	300,000	日本工学院支援金
	協賛金	400,000	400,000	多摩美術大学支援金
繰越金		989,433	989,433	前年度繰越金
合 計		1,989,433	1,989,433	
支出の部				
大項目	小項目	予算額	決算額	摘 要
大会運営費	運営費	1,000,000	1,000,000	消耗品・委託費・印刷費・旅費等
	予備費	989,433	989,433	
合計		1,989,433	1,989,433	

繰越 989,433 (2025年度特別会計へ)

2025年度 全国高等学校演劇協議会予算

＜一般会計＞				
収入の部				
大項目	小項目	予算額	決算額	摘 要
基本収入	会費	3,594,000	3,580,000	2000円×1790校
その他の収入	活動報告広告	770,000	700,000	「活動報告集」広告費
	寄付金	20,000	40,000	「演劇創造」広告費
	芸文振より	2,000,000	2,000,000	芸文振からの助成金
	高文連より	200,000	200,000	運営費
	利息	3,291	3,300	ゆうちょ銀行・みずほ銀行
繰越金	前年度より	-644,667	2,011,491	前年度繰越金
民間支援	協賛金	3,000,000	3,000,000	日本工学院
		930,000	930,000	四国学院・桐朋学園・NHK
合 計		9,872,624	2,464,791	
支出の部				
大項目	小項目	予算額	決算額	摘 要
管理費	旅費・交通費 (役員派遣費含)	1,842,012	2,100,000	香川・新潟 事務局会議旅費等
	通信費	52,504	70,000	切手、送料、ファクス等
	印刷費	165,490	180,000	賞状、封筒等
	消耗品費	5,742	20,000	文具、コピー等
	事務局維持費	70,000	70,000	事務局長行動費、会議室代等
	雑費	35,839	50,000	zoom、HP管理、謝礼等
	事業費	235,400	1,250,000	演劇創造151号・152号・153号、発送費
	ブロック連絡費	7,560	5,500	各ブロックへの振込費用等
事業費	活動報告発行	684,300	700,000	各都道府県活動報告集
	渉外費	0	50,000	全国大会関係・弔慰金
加盟費	高文連加盟費	100,000	100,000	
大会運営費	各ブロック大会	2,000,000	2,000,000	芸術文化振興会助成金(各ブロック25万円)
	各ブロック大会	2,000,000	2,000,000	日本工学院支援金(各ブロック25万円)
	全国大会	500,000	500,000	日本工学院支援 (香川、チラシ5万円含)
	舞台技術講習会	62,286	400,000	舞台技術講習会補助
	春季全国大会	100,000	100,000	
	予備費	2,011,491	2,869,291	
合 計		9,872,624	2,464,791	

＜特別会計＞				
収入の部				
大項目	小項目	予算額	決算額	摘 要
補助金	全国高文連	200,000	200,000	春季全国大会運営補助費
	全国高演協	100,000	100,000	
民間支援	協賛金	300,000	300,000	日本工学院支援金
		400,000	400,000	多摩美術大学支援金
繰越金		989,433	989,433	前年度繰越金
合 計		1,989,433	1,989,433	
支出の部				
大項目	小項目	予算額	決算額	摘 要
運営費	運営費	1,000,000	1,000,000	消耗品・委託費・印刷費等
	予備費	989,433	989,433	
合計		1,989,433	1,989,433	

— 感 謝 —

第71回の香川大会も無事に幕を下ろすことができました。開催県の香川県の先生方や生徒さん、ホールのスタッフの皆さんや青春舞台のNHKのスタッフの方をはじめすべての関わった皆様に感謝申し上げます。

また当協議会をいつも支えてくださる特別協賛団体の東京工科大学 日本工学院をはじめ協賛団体の四国学院大学、桐朋学園芸術短期大学、多摩美術大学などの各支援団体様に心から感謝申し上げます。

そして全国各地の演劇部の顧問を引き受けてくださっている先生方、毎日稽古をがんばっている部員のみなさん、今年度もありがとうございました。また新年度も素敵なお芝居をよろしく願いたします。